

# ウマ娘と腐れ目トレーナーの日常

緑茶P

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

コレは、蛇蝎のごとく嫌われたとあるボツチがいつしか多くの伝説的なウマ娘と残した数奇な軌跡の物語。

## 目次

皇帝と腐れ目 “伝説の始まり”	1
これは私のだけ？	5
皇帝の誤算	11
閑話 『正妻と愛人』	19
選考会 Ⅱ黄金狂騒曲Ⅱ	26
『“ちーむ”の始まり』	40
俺んところこないか？	46
測定	53
緩衝材と不器用な男 + 閑話	61
“貴重品”	69
閑話 『激闘！ 恐怖の鶏闘争!!』	76
ダスカ編 『抱擁』	82

## 皇帝と腐れ目 “伝説の始まり”

『圧勝!! 他の誰も寄せ付けぬ完全なる独走を決めた皇帝 “シンボリルドルフ”!! 鎧袖一触とは、栄光とはこのウマ娘のために存在する言葉だったか!! 史上初めての偉業を成したのは皇帝 “シンボリルドルフ”ですっ!!』

歓声と熱狂。歓喜と狂喜すら孕んだ観衆の声援は地鳴りすら孕んで競技場を揺らし私の全身を叩いてくる。

生まれた頃から夢を見て、息をするようにこの栄冠を得るための努力や思考を重ねてきた集大成がいま報われた感動がいまだに早鐘を打つ鼓動と合わさって体中を巡り万能感を私にもたらしてくる。

額を伝う汗が流れる風に冷やされてゆくウイニングラン。

皆が送ってくれる祝福に上げる事すら困難になるほど振りぬいた腕に鞭を打って優美に、可憐な笑顔を添えて振ることで応えつつ、用意されたマイクとお立ち台へと勢いを落しながら乗り込んで数拍。わずかな瞑想の果てに再び開いた瞳の前にはあの激戦を制した証であるトロフィーが差し出されている事が幾度と見た夢の世界ではない事を伝えてくれる。

ああ、いけない。

零れ出そうになる何かを必死に抑え込んで自分を律する。

そう、この日にどう振舞うかなんてずっと昔から決めていた。

歓喜に打ち震え、世界を手に入れた開放感からくる雄たけびを飲み込んで—— 厳粛に背筋を伸ばし、誰しもの眼に “王者” とはこうあるべきだと知らしめる威風堂々とした姿で世界に変革をもたらすのだ。

「私が、今日この場でここに立てているのは皆が支えてくれていた人々のお陰だ。誰が欠けていても私はこの栄冠には辿りつくことが出来なかっただろう……。ありがとう、感謝する。そして、許されるならば更なる栄光の道を皆とこれからも歩んでいきたい!! 我々の輝かしい日々は——ココから始まるのだ!!」

私の拙い演説に静まり返った会場は、その数秒後に先ほども超える

大歓声となつて応えてくれる。

誰も彼もが笑顔で、胸に誇りを持ち——生氣に溢れている。

そんな私の思い描く理想の世界が限定的とはいへ、実現した事に安堵と悦びを胸に秘めつつ笑顔で会場を後にする。遠ざかる歓声に必死に答えつつもゆっくりと退場ゲートへと入っていく。眩い程の日差しが陰つていき、爽やかな風は暗所特有のヒヤリとした冷気に変わりゆく。そんな仄暗い通路に——一人の男が佇んでいる。

あの熱狂と希望に満ちた会場の熱気など露知らぬと言わんばかりも昏く重たい瞳に気だるげな雰囲気。清潔感はあるはずなのに、清涼感なんて微塵も感じさせぬその佇まい。

既知でなければ即座に通報していたであろうその男。彼こそが本来は誰よりも感動していなければならない時であるはずなのだ。

なぜならば——彼こそが、史上初の7冠を制し伝説に名を連ねた「シンボリルドルフ」のトレーナーなのだから。

実績も何もないトレーナーでありながら、この私をココまで引上げ上げてきた稀代の変わり種。それがこんな男だと知つたら世間はどんな顔を浮かべるかと一人夢想してクスリと笑う。

「自分の初めてのパートナーが偉業を成し遂げたんだ。今日くらいはもう少し陽気な顔を見せてくれてもいいんじゃないか？」

「悪いが生まれつきこの顔でな。……この後の勝者インタビューは30分後にずらしたぞ」

「なに？」

彼のぶつきらぼうに吐き捨てたその一言に思わず耳がピクリと、はためく。

もちろん、その勝手な彼の行動に対する苛立ちからだ。

「冗談ではない。興奮が冷めやらぬうちにライバル達と健闘を称え合いい、ファンの皆に一刻も早く想いを伝えるというのは一刻一秒を争う急務といつても過言じゃない貴重な時間だ。ソレを勝手にずらすというのは——契約違反だ」

気持ち、足音も高く彼の前に詰め寄り思い切り睨みつける。

人間と私達では余りに身体能力に差があり、私が思い付きで彼に肩

でも当てれば容易く吹き飛ぶだろう。そんな危険行為も返答次第では辞さないつもりで彼の眼を真っ直ぐに睨みつけ威嚇する。だが、そんな私にも彼はたじろぐことも無くその視線を見つめ返すだけで淡々と言葉を返してくる。

「激戦を制した皇帝の左足首、その粗熱を取る時間くらいとつても文句は出やしないさ」

「……………気が付いていたのか」

「お前との契約内容は、お前の願う世界の実現」だからな。いまから本番の役者に資本となる軀を壊されたんじやたらん。本格的なケアはインタビュ―後にしてやるから黙って応急処置受けとけ」

出会った頃に、あの選考会の後に自分の元を訪れた数名のトレーナーの前で彼と交わしたあの契約。

「世界を変える」ことを望んだ私と、その為に必要な全て障害を取り除く」という彼の宣誓。

世界を照らす輝きになるべく生きてきた私が「光」だとするならば、それによつて生まれる影の全てを飲み込む「闇」として生きる事を誓ったあの日から彼は忠実にその契約を果たしてきた。そんな彼のサポートはいまの所は間違った試しがない。ならば、今回の提案も大人しく飲み込んでやるべきか。

「……………ケアの後の予定に口を出すことは許容しないぞ?」

「インタビュ―数社に、テレビ、校内での祝勝会に実家への報告に明日の全校集会での凱旋演説の文面確認———トレーニング以外なら好きにしろとは言ったけど、相変わらずのワーカホリックぷりに呆れるな」

「世界を変えるには私の人生は余りに短い。さあ、さっさと応急処置を澄ましてくれ、比企谷?」

「仰せのままに、皇帝陛下」

そんな軽口を叩き合った私たちは暗いゲートからようやくやく歩を進める。光に向かって進む私と、その背に浮かぶ影の様に付き添う彼。

それが、数々の歴史的なウマ娘たちを鍛え上げ世に送り出した事で世に名を轟かせた「比企谷 八幡」というトレーナーが世に名前を

知られた日の事で、最初の一步。

華々しい経歴を飾ったはずなのに何処までも影に溶けるような気味の悪さから各所から輦盛を買い蛇蝎のごとく嫌われ、なのに、なぜか多くのウマ娘から親しまれる不思議なトレーナー人生の始まりであつたのだつた。

これは私のだけぞ？

それは、トレセン学園の生徒会や目まぐるしい予定に忙殺される日常の中でふと息を吐いて窓の外に視線を走らせた時の事である。

厳しい冬も抜けてすっかりと春めいて、学園の桜の蕾も今にも咲きほこらんという柔らかな景色の中でとある男が目についたのだ。

気だるげな猫背に真っ黒な鴉の様な髪に一本だけ跳ねて春風に揺らされるアホ毛。それこそは自分のトレーナーであり、この「皇帝」シンボリドルフを入学一年目にして史上初の偉業の達成へと押し上げた立役者で、自分の野望を共にする契約を果たした「盟約者」。

ひねくれて素直ではないが、思いのほか誠実で有能な盟友「比企谷」に普段なら手でも振って声を掛けるのだが——上げかけた手は彼が別のウマ娘と何かを話しているのを見てビキリと固まってしまった。

おい、誰だ、そいつは？

君は、普段から気味悪がられて声もかけられないだろうに——随分と熱烈に頬を染めた乙女を隣に侍らせているなんて正に驚天動地、遺憾千万の限りだよ。

「会長？ 次の議題ですが……」

「ん？ ああ、すまない。——主だったモノは片付いたようだし残りは副会長と君たちに一任しよう。あまり私の判断に偏るのも今後の運営に差しさわりが出るだろうからね。結果は後日に簡易の報告書を貰えれば問題ないよ」

行き場を失った手がなんとは無しに握った机の淵がミチリと嫌な音を立てた所で掛けられた書記の娘にそういつて私は席を立つてもむろに友人であり頼れる副会長である「エアグルーヴ」に微笑みかけた。

一瞬だけ眉根を寄せて反論の口を開きかけた彼女は窓から見える光景を眺めてしばし、ふかーい溜息を吐いて私を追い払うように手を振って送り出す。

「蹴飛ばされては敵いませんからね。さっさと行ってください」



「ああ、すまないが後は宜しく頼むよ」

友人としても、相棒としても、申し分ないチームメイトの彼女だが何よりもこういう所で機転を利かせてくれる彼女がいてくれたというのは私の学園生活が幸運に恵まれていたと思える何よりもの証左だと思ふのだ。

人の恋路を邪魔する奴は、ウマ娘に蹴り殺される。

うむ、実に至言である。

危うく私は掛買いの無い友人を蹴り飛ばさなければならぬところだった。

そんな独白を心の中で呟きながらもツカツカと足音も高く生徒会室を後にした。

春の匂いが濃くなってきた時分の事。『春眠暁を覚えず』の精神でのんびりと惰眠を貪ろうとしたのだが世の社会人というのはそももいかなないモノらしく、担当ウマ娘が一人しかいない暇人をほおっておいてはくれないモノらしい。

これって俺の仕事かしらと思わざる得ない様な理事長やたづなさんの書類を手伝わされたり、授業の補助に駆り出されたりと実にこき使われていくタクタになった虎の刻。いわゆるオヤツ時である。

中庭でクソ甘いお気に入りのコーヒーを呑んでいると見知らぬ生徒に声を掛けられた。

「アンタが『皇帝』を作ったトレーナー？」

「んあ？」

制服に身を包んだ赤毛の少女。不躰で高圧的な声音と品定めするような遠慮のない視線で要領を得ない事を俺に問うてくるもんで変な声が漏れてしまった。

いや、今現在で『皇帝』なんて呼び名を持つのは自分の担当ウマ娘だけであるので他に心当たりは無いのだが——『作った』と言われ

ると反応に困る。

「ふん、腹芸は随分と手慣れてるみたいね。喜びなさい、私もアンタにコーチングされてあげる。明日からこの施設に毎日通うように」

「……………色々とツツコミどころはあるけれど、何でここじゃないんだ？」

「決まってるでしょ。こんな古臭い建物で使い込まれた設備で効果なんて出る訳ないじゃない。今までは我慢してあげてたけど1年ちよつとやって効果が出ないなら私のプライベート用の最新鋭の機器でやった方がいいに決まってる。貴方は他の使えないトレーナーとは違うって事をココで示して頂戴？」

その後も聞いても無い実家の裕福さや、ここの悪口やら、取っても無い皮算用の将来設計なんかをペラペラ喋る彼女に圧倒されつつも出された紙の内容をペラペラ。

自分なんかでも聞いた事のある大手メーカーの銘が打たれたラベルと家名に、写真で見ただけで分かる海外なんかでも取り入れられている最新機材がズラリとした施設。それに莫大な初期報酬に実績に応じた成功報酬にその後の雇用プラン。

どうにも、上手くいけばトレセン学園に対抗できる第二の育成施設にしていく計画でこの子を勝たせればソコのトップにもしてくれるとの事。

なんともまあ——「ご苦労な事だね」

俺の紡ぎかけた言葉を、聞きなれた堂々たる声が代弁した。

固まる見知らぬお嬢様と、読んでいた紙をすっぱ抜かれた俺。そんな二人を睥睨するようににこやかな微笑みを浮かべる担当ウマ娘である彼女「ルナ」。世間一般で言う「シンボリルドルフ」様がそこに立っていた。

「今日は会議で遅れるんじゃないかなかったか？」

「下のモノに采配を任せるのも指導者の器という奴さ」

世の中、それで沢山の悲鳴があがってるんだよなあ……………なんて漏らせば面倒な持論が広がるのが分かっているので肩を竦めるだけで答え、急に静かになってしまったお嬢様に視線を戻した。

あれだけ饒舌だった口は啞然と開かれ、バラ色だった頬は真っ青になっっている。

そんな彼女に、無慈悲に微笑みを浮かべたルナが資料をペラペラ弄びながら歩み寄っていく。

「ふむ、君は『ライナーグループ』のご息女だったか。ああ、いや、君の陳情は良く分かるよ？ 確かに最新鋭の海外のトレーニング機器にアンテナを張り巡らせる能力は必要だし、そういう面では一歩だけ我が校も後れを取ってしまったているのは事実。君のコノ『陳情』に応えられるように我々『生徒会』としても全力で取り組むことをココに誓おうじゃないか。どうしたのかね？ 随分と顔色が悪い。もし必要なら保健室まで送ろう。君は少々居心地の悪い古びた場所だが衛生面では折り紙つきさ。遠慮することは無い、さあ、肩を貸すよ。

成金風情が思いあがるな。貴様らの家なんて明日には取り潰せる、身の程を知れ。今度、君が私の男に近づいてみる。……容赦は、しないぞ？」

「ひっ」

にこやかに近づいて行ったルナが肩を貸した瞬間にお嬢様っぽい少女は本当に死にそうなくらい真っ白な顔で駆け出した。目で追うまでもなくあつという間に消えてしまった彼女の足を見ていると割かし冗談でもなく優勝を目指せそうだと思ってしまうのはトレーナーの性か否か悩みどころである。

そんなどうでもいい事を考えていると戻ってきたルナが普段よりも荒く腰を隣に下ろした。

「あんな調子じゃ生徒たちと打ち解けられるのも随分先だな」

「アレは例外だからいいのさ」

いや、隣に座るのはいいんだけど……いつもより近くない？ というか、ずりずり寄ってくんない。せまいせまい狭いっ！

ベンチに座ってから圧迫するように俺の隣に寄り添った彼女は俺の肩をがっちり掴んで何を思ったか俺の頭のアホ毛に噛みついてきた。何なになになに?? 今まで1年ちよつとの付き合いで無かった出来事に普通にビビる。何してんのコイツ???

「なに？なにになになに？ 普通に怖いんだけど??？」

「君は——私が来なければ、あの誘いに乗ったのかい？」

いつものじゃれ合いの延長で聞いたのだが思いのほかに重たい声が返ってきた。

人のアホ毛をしゃぶりつつもなんとなく弱々しいその声になんと答えるべきか少しだけ悩んだ俺は——いつもの様に答えた。

「『皇帝』がそんな簡単に作れるなら俺がききてえよ。——にわか  
かの俺が言うのもあれだけど、『王者』ってのは生まれた時から決  
まつてる。だから、俺程度じゃ機材が揃おうが、金があるうが、作れ  
ないんだからある方にすり寄った方がいいに決まってる」

「……………ふふっ、君は変わらないな」

聞きようによつては、酷い言葉だ。

努力なんて意味がなく、生まれながらに結果は決まっている。

そんな、無慈悲な言葉。

だが、コイツのトレーナーになってから1年余りたっても思う。

あの日、あの会場で、誰よりも輝いていた彼女だけを引き寄せた。

コイツが勝たないなら他のどれだって駄目だろうと素直に引きこ  
もろうと思った。

その結果、ルナは——『皇帝』へと至った。

おかげで俺は未だに惰眠を貪れることも無く、こうして忙しい  
日々を送っている。

恨めばいいのか、喜ばばいいのか複雑な所ではあるが、まあ、彼女  
の行く末を楽しみにしている時点で俺の負けなのだろう。そんな俺  
の独白を知ってか知らずか、日は暮れてゆくのであった。

「ずっと——私だけを見てくれ」

「いや、普通に無理だけど」

そんな他愛の無い応酬の果てにアホ毛を引きちぎられた男がいた  
とかいないとか。

ちゃんちゃん♪

## 皇帝の誤算

さてはて、少しだけ諸君には私の来歴を振り返るのに付き合っ  
て貰う事は可能だろうか？

ああ、いや、心配はいらないよ。何も長々と自己顕示欲に駆られた  
自画自賛の手前味噌な演説をしようという訳ではない。ちよつとし  
た自分の今の状況に置かれた訳を整理したいというだけの話でそん  
なに長くなるものでもないし、大したものがある訳でもない。

私、“皇帝”ことシンボルドルフは名家に生を受け、幼少の頃か  
ら頂点に立ち多くの民衆を束ね導くための英才教育を施されてきた  
ウマ娘である。

とはいっても、皆が思うような過酷な環境で生き延びた訳でもなく  
多くの愛情と期待を込めて育てて貰ったので実際はそこまで荒んだ  
過去がある訳でもない。

それに、私自身も小さな頃に呼んだ偉人たちの物語や家族のそうい  
う姿に憧れて自ら望んだ道でもあることだしね？

そんな私は幸運にも才覚と天稟に恵まれ、同世代どころが世界レベ  
ルで見回しても座右の銘としている“抜きんでて、並ぶもの無し”と  
いう言葉を実現する事が出来ていたと思う。

レースデビューから無敗の7冠達成に生徒会業務を通じてのいく  
つもの悪習への改善。

そういった事に全力で取り組んで、確かに自分の“世界を変える”  
という目標へ正に順風満帆、勇往邁進している日々は充実感と確かな  
自信を私に齎してくれた。

さて、少しだけ自慢げになってしまったのは自分の未熟さを隠しき  
れず恥ずかしい限りなのだが恥かきついでもう一つだけ白状させ  
て貰おう。

この軌跡は私一人では為しえなかった。

レースでの結果が全ての我々にとって、“生徒会”というのは実質  
の所はレースで振るわない娘達の就職先の経歴づくりが精々の役職  
で、こんなにガッツリ取り組むべきものでは無かった筈なのだ。

普通のトレーナーは私の理想に理解を示さず、生徒会を辞すことを強いた事だろう。

というか、スカウトに来たベテランたちから見せて貰ったスケジュールには実際にそんなものを考慮したモノは一つとしてなかったのだから向こうからしても青天の霹靂という奴だったかもしれないね。

その中で、一人。

昏い瞳をしたあの男だけが言ってくれた。

『好きにやれ』と。

投げ出す訳でもなく、押し付けるでもなく——全てを任せてくれた無名の新人トレーナー。

彼を選んだ時に誰もが私の正気を疑った。自分の見込み違いだったと唾を吐き、軽蔑の視線を投げかけ、酷い者だと罵倒までしてきた。程度の差はあれど、誰もが想いは同じだったろう。

『レースを、舐めるな』

そんな彼らの経験や実体験から来るむしろ暖かい諫言だったはず。だけれども、彼はそんな言葉や行いをされても揺るぐことなく私だけを見つめていた。

私も、彼を見つめていた。

私の中にある普段のお澄まし顔に包まれた“狂気”とも言える貪欲さ。

この世の全てを我が思うがままにするために、全てを飲み下すソレを彼はただただ受け入れてくれた。

そこからは、ただひたすらに駆け抜けた。レースも、実務も。全てをだ。

嘲笑う観衆の声と視線は驚愕と興奮に塗り替えられ、レースで結果が振るわない自分に自信がなく弱気だった生徒会を一から立て直して誰もが胸を張れる組織に組み替えた。

そして、掴んだ史上初の、空前絶後の7冠。

あの日、私が蒼天に伸ばした指は——確かに世界を掴んだのだ。

そこから、少しだけ落ち着いた2年目。

生徒会長になった私は頼れる右腕に逞しくなった部下たちと学園をよりよくし、レースもソコソコの結果を無敗のまま守り続けた。それら全てが上手く回り、来年度からはいいよといった所までが私の来歴となる。

見応えがあった？ ははっ、そういつて貰えると嬉しいね。

実は結構な回数を生徒たちにこの話を強請られて練習は十分だったという訳だ。

さて、ここまで聞いて貰って私の事を知って貰った皆に聞きたい。そして、どうか無知蒙昧な私に知恵を授けて欲しいんだ。

そんな輝ける栄光の日々を影ながらに支え、自分の中の地盤となっていた信頼すべきトレーナー“比企谷”という男がいつもと変わらぬ気だるげな顔で——“契約打ち切り”の話なんかを持ち出してきた時に“私”は……“皇帝”はどうするのが正解なのだろうか？

この時の最適解が分かった人はどうか、私に教えてくれ。

まあ、それも、全ては『後の祭り』という奴なのだけけれど。

|||||

「んじゃ、これが契約更新打ち切りの書類だから」

「へ？」

雪解けも進み、麗らかな日差しが差し込む午後の事。私から声を掛けないとトレーニングの時以外は滅多に呼び出しを掛けない彼に呼ばれた会議室で飄々と言われたその一言に私は思わず間抜けな声を出してしまった。

ついさつきまで、『今年の旅行先の相談だろうか？』だなんて胸を躍らせてここに来た私の有頂天な脳には中々その言葉はしみ込んでこず、理解が追い付いた頃にはついつい笑いが零れてしまった。



「まったく、冬が抜けて気が抜けるのは分かるがしつかりしてくれ、比企谷」。生徒会長なんて過分な役職を賜っている私ではあるが2回生なのを忘れたのか？ つまり、もう一年は君の世話になるというのに今からそんなんでは……いや、もしかしてそういうジョークという奴かい？ ははっ、コレは一本取られて——「いや、別にジョークでは無いんだけど」——はっ。」

饒舌に語る私の言葉を、彼の気だるげな声が遮り今度こそ自分でも驚く程に低い声が出てしまった。

「——誰に、何を言われたんだい？」

それでも、私は辛うじて微笑みを形作りゆったりと彼に一歩ずつ詰める。

臓腑を炙る怒りとソレに伴い零れそうになるドロリとした感情を必死に飲み込みつつも頭をフル回転で突然に彼がこんな事を言い始めた理由を探る。

少なくとも、天下の皇帝のトレーナーを自主的に途中で降りるメリットなんてモノは存在しない。ならば、外部の圧力によってというものに普通は行きつく。あれだけ嗤っていたモノたちが今度は掌を返して自分の大切なモノとの絆を引き裂こうとしているのに溜まらない嫌悪感を感じつつ、実家の力を使ってでも絶対に潰す決意を固めつつ彼にその名を問う。

だれだ？——その、愚か者の名は。

だれだ？

「……………いや、お前が今年ほとんどレースに出ないって言ったんじゃないっけ？」

「——へ？」

そこで彼から出てきたのはまさかの私自身の名前。

その意味と、彼にこの間語った自分の指針を思い出し頭を抱えた。言った。そういえば、確かに言った。

いまだに無敗で現役の中で3本指に数えられる自分がクラシックやトウインクル・シリーズに出過ぎれば他のウマ娘たちの実績や将来の芽をつぶすことになるため出場は最低限にして将来的に運営側に回るであろう自分は内政方面に力を入れていくと——事実上の引

退宣言に等しい言葉。

だが、あのダイナーの時に私はてつきり彼は今までと変わらず自分の傍に居てくれるものだと思い込んでいた。

才能はあっても、根本的にやる気のない彼はそのまま自分と一緒にココを出てついてきてくれるものだと思っていたが——彼はそういえば「トレーナー」だったのだ。

担当が引退すれば他のウマ娘をスカウトしなければならぬし、レースに出ない担当なんてついていない意味もない。そんな当り前の事をほろ酔い気分の自分は完璧に見落としていた。

何たる失態。何たる遠慮近憂。

え、というか、まって？ 余りにあつさりしすぎてない??

私と君の関係はもつと熱いものだと思つてたのに何でそんな飄々としてるの？

おかしくない???

「な、なんでだつ、新しい娘を育成するのは良い!! だけど、契約はそのままだつていいじゃないか!! 契約違反だ! 君は私の理想を叶えるという契約をしたじゃないか!!」

「いや、契約はもう実質的に達成してるじゃん? というか、お前が走らないとなると俺の給料がゼロになるし、今までも担当が増えそうになる度にお前が追い払うから理事長に怒られてたろ」

「金か! それなら心配することはない!! 私が君を養つて見せるとも!! 大体が他の娘にうつつを抜かして皇帝の側近が務まると思つてるのか君は!!」

「担当ウマ娘に現金を支給されるとか一番のスキヤンダルじゃん……というか、そういう所がいつも怒られてたのさては理解してないな?」

がつくがくと彼の胸倉を掴んで揺らす私に彼は心底呆れたような冷たい目と口で正論ばつかを投げかけてくる。

あ、ヤバい。ちよつと泣きそうだ。

それに脳内にヤバい思考も湧き出て来てる。

具体的に言えばいつそのこと生徒会をほおり出して軒並みレース

を総なめにしてやろう、とか。だが、そんな事をすれば折角ここまできた私の理想の世界を叩き潰してしまう事になる。だけど、そうしなければ彼は離れていってしまう。

いつそ、彼がトレーナーを辞めて家で抱き込んでしまえばなどと思ったりもするが専属だった彼がそんな事になれば間違いなく嗅ぎつけられるだろう。むしろ、皇帝を育て上げた彼が一瞬でも所属を離れれば虎視眈々と狙っている海外の協会が黙ってはいないはず。

グルグルと脳内を駆け巡る思考と理想の板挟みで遂に涙腺が決壊しそうになっている私の耳に力強く扉を開き、幼気なのに貫禄のある声が聞こえてくる。

「話は聞かせて貰った…その件、我にお任せあれ!!」

「理事長？」

扉を開いて現れたのは、この学園の最高責任者である理事長。幼げな風貌に声。だが、その振る舞いは堂々としたもので国内において彼女にレースやウマ娘の知識で敵うモノはおらず、トレセンを国内トップの育成施設に押し上げた内政の力は語るまでもなく化け物級の人物。

そんな彼女がこの修羅場とも言える会議室に乗り込みいつもの様にかんからりと笑い声を響かせる。

「うむ、自分と皆の将来を見据えて身を引くシンボリドルフの判断と一心同体のトレーナーに続行してもらいたい心境は良く分かる。一方で、実績と収入を稼いでなんぼもトレーナー、それどころが他の授業のお手伝いで糊口を凌いでいる比企谷が新たな担当を探すのも道理。」

だが、そういうどうにもならない状況にこそ我が権力と采配がある!!

新米トレーナーには異例ではあるが、**「比企谷 八幡」**！ 貴様には新設のチーム**「コルヴィス」**を与えよう!!

神の右腕として知恵と献身を差し出した神鳥のようにルドルフと共に多くのウマ娘を導くがよい!!」

朗々と語られるた内容は、余りに異例のモノ。

本来、複数のウマ娘を同時育成するチームを率いる権利はベテランで数多の実績を持ったトレーナーだけに許されるもの。その他のトレーナーは実績に応じて段階的に担当を増やしていくが、大体のトレーナーが担当できるのは一人か二人が関の山である。

それを遥かに超える「チーム」を率いるのは一流の証でありつつも、余りに重い十字架だ。

たった三年という短い期間で人生の全てが決まるこの学園の生徒たちの人生を複数も背負わなければならない。その重圧に耐えて、的確に指導を行っていく事が出来るモノは実に少ない。だが——私は、そうと知っていても彼にその話を受けて欲しい。

少なくとも、彼という地盤を失くしてもう私は走れなくなってしまうている。

だから、せめて——この学園を私が卒業するまでの間だけは。そんなエゴと自己保身に満ちた私の願いを浅ましく思いながら彼を見つめる。

「えっ、担当って一人じゃなくてもいいんですか？……じゃあ、それで」

余りにあっさりとその提案を受けた彼に思わず私と理事長は肩透かしを食らって目を丸くしてしまう。

「い、いいのかい？ 生徒会と兼任だった私とは他の子は訳が違うし、その他の責任も大きくなっていく。そんな重大な決断を二つ返事でよく考えもせず——」

「お前は俺を首にしたいのかしたくないのかどっちなんだ……。まあ、いまさら他の奴らにお前のトレーナー面されるのも面白くなかったしな。どうせ空いてた時間にしてたトレーニング補助が自分の担当になるってだけの話だ。なんなら今までのタダ働きが異常だったまでである。——だから、あと一年だけよろしく」

「勿論だともっ!!!」

照れ臭そうに、そう語る彼になんといつていいか分からない感情が湧き上がりそのまま彼に思い切り抱き着く事で少しでも伝えようと試みる。

意地悪で、そっけなく、やる気の無さげな彼。

だが、こんな事になってようやく気が付いたが——このパートナーがいないと私はもう駄目なのだ。

絶対に手離すものか——そんな万感の想いを胸に私は少しだけ泣いた。

## 閑話 『正妻と愛人』

いつか来る、と分かっている問題でも人間という奴はソレの解決に乗り出すのはのっぴきならない所まで進行してしまった時。

そんな例に漏れず俺“比企谷 八幡”という愚か者も頭を抱えてうんうんと一人で寮の自室で頭を抱えているのであった。

俺の目の前にずらりと並ぶ資料に契約書一式。そして、今度の選考会に参加するというウマ娘たちの名簿とプロフィール一覧。

片方は先日、こじやれたレストランで“引退”について示唆し、今後の展望を熱く語ってくれた我らが皇帝にして、愛バである“シンボリルドルフ”とのトレーナー契約打ち切りの書類。もう片方は、唯一の相方が引退する以上は次のウマ娘をスカウトしなければならぬための下調べである。

まあ、ルナの件についてはしようがない。

どっちにしろ、後一年でやってきた未来であったし、彼女の夢を想うのならばソレは最良の選択肢とタイミングであったのは間違いないのだから。

“皇帝”として彼女が打ち立てた空前絶後の7冠という偉業。この実績があれば文句なくマスターズに殴り込み、世界を股にかけて活躍することが出来る。だが、その道を選べば彼女の舞台は世界へと移り拠点も自然とそちらになってしまう。

いまだ国内の革命すら十全に行えていない現状ではソレは少し時期尚早。ならば、このままこちらの運営に回って国内を掌握していく必要がある。他の娘への配慮もあるのだろうけど、理路整然とした計画は確かにと俺も頷かざる得ないモノだった。

そして、頷いた以上は俺も認めなければならなかった。

もう、自分が彼女を支える役目は果たし切ってしまったのだ、と。

頭では分かっているても、彼女に引つ張って貰っただけの現状とはいえはつきりと言われるまでソレを見て見ぬふりをしてきたのだから我ながら往生際が悪い。いや、未練がましいといった方が正しいのだろうかけれども。

そんな情弱な自分に苦笑を一つ漏らして、最後の書類にサインをして全ての準備を整えた。後は、ルナにサインを貰えば無事手続き完了となる。

よくトレーナーの間では悪ふざけで「離婚届け」なんて言われるこの手続きで話あるがなるほど、年がら年じゆう付き添って苦楽を共にした相手との訣別は体験してみるとふざけて笑いに変えないと少々応えるモノがある。

そんな取り留めもない思考に苦笑いを漏らしつつ、気を取り直してもう片方の選考会の資料に向き直る。

年に数度行われるこの選考会はトレーナーとマッチングすることが出来ずに未だデビュー出来ていないウマ娘たちが実力を示し、スカウトなり交渉を持ちかける非常に大切な催しである。

なにせ、トレーナーと組まなければレースに出ることも出来ず、トレーニングすら個人にあったモノではなく教官達から課される大人数用の出来合いのメニューを繰り返す事しか出来ないのです。ココで有力なトレーナーと巡り合う事はある意味ではレースで結果を残すよりも重要なくらいだ。

もちろん、ソレはトレーナーだって同じことで優秀なウマ娘と組めれば実績となり、次により繋がるのだから芽の無い子に同情なんかでは時間も割くことはできない。ましてや、実績も経験も無ければ複数の担当になれず、最高峰のトレーナーの証である「チーム」を持つことも出来ない。

だから、まあ、わりかしに色々な明暗が分かれる厳しいイベントなのだ。

その代表例である「皇帝」を引き当てた俺が言うんだから間違いない。

そんなこんなで、次の担当候補を探してページを捲ってはいるのだがどうにもピンと来る娘がない。新人の頃からルナの走りを見てきたせいとか、デビュー前の子でピンと来るわけもないのだが……うーむ、コレが噂の贅沢病という奴か。恐ろしい。

だが、まあ、コレが駄目だとおまんま食い上げなので地道にこつち

は探していこう。

駄目なら駄目で貯金が尽きるまでぐうたら生活に戻ってもいい。ルナとの関りで生徒会から学園関係とここ数年は忙しすぎたのだから——ポチポチ、やっていこう。

そんな事を考えて久々の余暇に何をしようかと空想する俺が——学園長にチーム“コルヴィス”を与えられプレッシャーと頭痛に悩まされる事になる日々が幕を開ける事になるのは数時間後の話であつたとか、なかつたとか。

「エアグルーヴ、旦那の浮気が公認で認められてしまった……ぐすつ」  
「浮気って……会長」

ここは天下のトレセン学園、生徒会長室。歴史と伝統を誇る我が校の代表がおわします部屋だけあつて内装は質素ながらも優美で重厚な設えが成されたその部屋に報告書を持ってきたのだが何度ノックをしても返事がないので一声かけてから覗いてみれば——この世の終わりとも言うかのように陰気な影を背負った会長こと“シンポリルドルフ”が机の上でメソメソと項垂れていた。

いつもならば毅然と人の上に立つ彼女がこんな事になっていけば血相を変えて相談に乗るのだけでも、今回の件は学園中で話題になつているあの件についてだろう。

私は漏れ出る溜息を押さえる事が出来ないまま、そつと扉を閉じて彼女の方へ歩み寄つて声を掛けた。

「相方の昇進をそんな風に言うのは貴女位のモノですよ。というか、ソレが無ければ“離婚”だったのですから多少の事は多めに見るべきかと」

「……理屈ではそうとも。だが、私以外の担当を持たれるというのは実に嫌な気分なんだ」

鬱々と机に“の”の字を書いて不貞腐れる彼女に呆れそうになる



が——まあ、私とて一人の女でウマ娘。気持ちには分からんでもないというのが正直な所である。

ウマ娘、というより私たち中央のトレセン学園に集まるモノは少なからず闘争心が激しい。負けるのは何よりも辛いし、所有物に別の匂いがつくのは不快だし、横取りなんてされた日には諺にもある通り後先考えずに足が出る事だろう。

だが、さつきも言った通り今回の件はそこに目を瞑ってでも飲むしかない。出なければ、普通に契約解消して繋がりも残らない最悪の結果が待っているのだから。

「というか、今回の異例の対応は私達とアイツの積んできた地道な成果の功績でもあるのですから悲観すべき事ばかりでもないかと」

「……………うん？」

いつまでもそうされていても困るので、話題を少しでも明るい方向に向けて気を取り直して頂くことにしよう。

いつもより若干だけ幼い動作で首を傾げる彼女に視線を合わせて諭すように言葉を紡いでいく。

そもそもが、長年に渡って実績を積んできたトレーナーでもない彼に理事長がチームを託したのだったっていつもの気まぐれという訳ではない。彼は会長のトレーナーとなっただけからよくココに引張られて事務仕事や相談等を受けていた。

始めの頃こそ、私も自分の男を侍らせて職務に取り組む彼女に反発を覚えなかった訳ではないが、意外な事にアイツは文句を言いつつも堅実にその仕事の補助をこなし、学園側との折衝を行う時はトレーナーや一般人側の意見を組み込むのに非常に貢献していた。

そして——トレーナーが付かず結果が伸び悩んで生徒会を訪れる多くのウマ娘達に的確な指導や改善点を与え続けていた。

自分の実績にもならないウマ娘の指導なんて、損でしかない。担当以外のウマ娘なんて、燻ってくれていた方が都合がよい。

そんな反吐が出るようなトレーナー達の大多数が唱える正論の果てに何人の子が希望を持つことも出来ずに無茶や諦めを重ねてこの学園を去ったのか分からない。

そんな娘達にとって、彼は希望で、悦びであった。

結果を出してトレーナーが付いた子もいる。出ぬまま卒業した子もいる。だが、その誰もが一樣に彼に感謝していた。

少なくとも、勝たなければ価値はないと言われるこの冷たい世界で——一人ではないと思わせてくれたから。

そうして、気だるげに、だが真摯に彼がアドバイスをしてきたウマ娘の数はいつの間にかベテラントレーナー以上の数となって聳え立つ。打算と利益を度外視した捨て身のような献身は——他のトレーナーなど遠く及ばぬ経験を溜め込ませていた。

人とウマ娘の融和、経験、そして——“皇帝”を無傷のまま“絶対”に押し上げたその実績はどんな抗議もねじ伏せる重みを持ち、ルドルフの望む“皆が笑える世界”への偉大な一歩の先例となった。

内助の功、その言葉にこれ以上のモノがあるだろうか？

私は、少なくとも無いと断言して見せる。

そう、つらつらと述べた私に驚いた様に見開いた会長——いや、“ルナ”は少しだけ照れたように柔らかく微笑んで自らの頬を軽く叩いてその瞳にいつもの光を灯す。

「そう、だな。少なくとも、私達が築いてきた道はこうして新たな道になってくれた。そのことを私が後悔してしまうのは許されない。——何より、こんな情けない私の事をいつでも支えてくれる友人がいる事こそがその道の正しきの証明だろう、エアグルーヴ？」

「元気が出たようで、何より」

凜と強く、威風堂々に気高く、誰よりも無垢に理想を信じる私の友人が伸ばした手を取り力強く握り返す。

これこそが、私の上司に相応しい姿だ。

さて——元気もでたようですので、“私の”本題に入ろう。  
「……とところで、こちらの資料が会長にはいますぐ必要になると思っ  
僭越ながら作らせていただきました」

「うん、これは何の名簿かな？」

「なんと言いますか……アイツのスカウト待ち一覧ですね」

「え？」

「いいですか、会長。古来より貴族とは一夫多妻制または正妻の他に愛人を持つことをよしとして血を残してきました。コレは実に重要な事です、問題は正妻には外交面での職務と重圧が多いため家の切り盛りや側室たちの管理は筆頭側室や愛人のリーダーを作ることによって管理してきました。そのために正妻と側室は明確な上下関係を示しつつも限られた有限の権利を争うことなくお家を治める事が出来たわけです。

分を弁えた側室と、ソレにお目こぼしを与えつつも旦那に目くじらを立てない広い器が正妻には求められコレを的確にこなすことで――」

「ほう、では――このリストの天辺に太文字で書かれてる“エアグルーヴ”というのは同姓同名の別人ではなく、君の事だという認識でいいのかな？」

「…………目くじらを立てない心の広さこそが「雌狐がこんな所にも隠れていたのか」――あだっ、あだだだだっ、いいじゃないですか!! 今まで実績解除されないから我慢してたんです!! もう普通のアドバイス通りの器具トレーニングじゃ記録が伸びなくなってきたんですから私だってアイツに直接指導して欲しい!!」

「喧しいー、あれだけいい感じの事のためっておきながらコレが目的だったんじゃないか!! 大体、君にはトレーナーいるだろ!!」

「あんな言われるままにトレーニング器具の準備をするだけのトレーナーじゃありません!! というか、遂にこのあいだ私に生徒会やめろとか言ってきたので速攻クビです！」

クビ ツ!!  
「――だ、だからといってそうスグに受け入れられるモノでもない!!」

「いいじゃないですか！ ケチ!! 会長のケチ!! 大体、何処の誰かも分からない娘を引き入れるよりこつちのメンバーはその辺納得済

みだから揉めないで一番いいプランでしょう!？」  
「むっ、ぐうぐうう——そういう問題ではな——いっ!!!」

## 選考会 Ⅱ 黄金狂騒曲Ⅱ

さてはて、天気は青く澄み渡り快晴、芝は良好。春風が心地良く吹き抜けるここ中央トレセン学園の第二ダート場ではそんな穏やかな陽気を弾き返す様な群衆の熱気が溢れていて少々だけ息苦しい。

見渡すばかり視界を埋め尽くす鋭い眼光を光らせるトレーナー達に、溢れる闘志を全身から漲らせ殺気立つウマ娘達。そして、その光景を収めようと狂ったようにシャッターを押しまくる興奮気味の記者陣。

その異様な空気に包まれたこの会場には誰も彼もの夢や野望が渦巻いて、お互いを見極め値踏みをし合う修羅場と化している。

まあ、この『選考会』で巡り合う相手如何によって今後の自分がどこまで上り詰めていくのが掛かっているのです。それも止む無し。それに、高みの見物を決め込んでいるトレーナー達やパートナーを既に見つけているウマ娘達が観客席でツマミを頬張りつつあれこれと話しているせいかもしれない。一種のお祭りのような様相を呈す恒例の光景といってもいいだろう。

むしろ、新人、中堅、ベテランと問わずレース前に既に目ぼしいウマ娘を皆見つけていて必死にアピールしていたり、その中からより条件の良いものを見極めたりと忙しそうなかでぼんやりと壁際でソレを眺めている俺の方が変わってるとすら言える。やだ、俺ったらこの歳にもなつて悪目立ちしちゃってるね？はずかしいね？

「なんだよ、新進気鋭のエリート様は随分ゆっくりしてん、なつ、と！」「……まさか、右も左もわからなくて呆然としてるだけですよ」

だから、こんなお節介焼のおっさんに絡まれる事になるのである。投げられた缶コーヒーを受け取りつつその軽い声の方に目を向ければ刈り上げたツブロックに栗毛の長髪を流した伊達男『沖野トレーナー』がニマニマと意地悪気な顔を浮かべつつ俺の隣に居ついた所であった。

ここ、トレセン学園に来たばかりの頃の最初の2週間だけ強制的に

付けられる先輩トレーナー制度で俺の担当となった男であり、いまだに俺に気さくに声を掛けてくる数少ない変人の一人でもある。

「嘘つけ、お前みたいなのがそんなナイーブな訳があるか。単純に目ぼしい娘が見つからなくてやる気が出てないだけだろう?」

「……………人聞きの悪い。一応は、下調べまではしては来ましたので後は実際に見て決めようってだけです。そういうエリートトレーナーの沖野さんこそいい子が見つからなかったんですか?」

「敵にオススメを教える訳ないだろうが、ばーか。俺はもう目ぼしい子には声を掛け終わってるんだよ。——今年の『スピカ』は一味違うぞ?」

自慢げにニマリと笑って俺の背中を強めに叩く沖田さんはその反動でコーヒーを吹き出してしまったのを大笑いしながら去っていく。

あんな浮ついたニーちゃんのように見えるが学園を代表する若手トレーナーの急先鋒であり、俺の特例を除けば最年少でチームを持った傑物。そして、世界に名を馳せたサイレンススズカを育て上げた彼がそういうのにも訳があり、今年は近年稀に見る『大豊作』の年とも言えるルーキーが大量に入ってきて来ている事で学園中が騒がしかった。

ただの噂程度だと思っていたが——あの人がそんな事を言うのだからどうにも噂は本当なのかもしれない。

孤立気味で担当がいなくなる俺を心配してわざわざ『敵』にそんな助言を残して、『さっさとスカウトに奔れ』なんてケツを蹴りに来てくれるのだから本当に面倒見のいい先輩である。

久々に感じた人情味に思わず苦笑を零しつつ、俺も固まった背中を伸ばして歩き始める。

ルナがくれた目ぼしい新生や在校生の名簿をピラピラ弄びながら熱気と思惑の渦巻く会場へ俺も足を踏み込んだ先で俺の目を惹いたのは——

↓ ・高らかに『はちみ』の歌を歌いながら準備運動する小柄な少女だった。

・取り巻き数人を引き連れ、誰憚ることなく“一流”を名乗る少女であった。

・囲まれる多くのトレーナー達の声に優等生然として答える赤毛の少女であった。

・“ばくしーん”とか叫ぶ変な娘だった。

・ヘラヘラと他の子を励ます諦めを目に宿した少女であった。

・お嬢様然とした高貴な少女であった。

・・・・その他、いっぱい選択肢。

---

以上の中から、3名ほどちよつかいを掛けてレース開始時間が迫ってきたので俺は最後の一服をするために会場を後にしたのであった。

会場からほんの少し離れた場所にある喫煙場——は同業者が大量にたむろして最後の情報交換や駆け引きに勤しんでいて混じる気がしなかったので更に離れた公園に足を運んだ。少なくとも、俺が混ぜられて空気を悪くするよりは小さな規則違反でたずなさんに怒られる方がよっぽど平和だろう。あまりの自己犠牲の精神にノーベル平和賞を貰えるまでである。

また、世界をすくつちまったらしいぜべいべー。

そんなアホな事を考えつつ細巻きを取り出して燻らせつつ公園にたどり着くと——芝生の上で大の字になっていびきを掻いてる“変なの”がいた。

学園内であるからして生徒が昼寝をしてもおかしくはないのだが、選考会の最中は大体の生徒は会場にいるし、服装も制服ではなく体操服なので出走予定の娘がこんなレースギリギリでココにいるのは普通あり得ない。

なんとなく、関わりたくないなあ……とは思いつつもほんの少しだ

け残った良心が俺にお節介を焼かせる。

深い溜息を漏らしつつ最後の服を深く吸い込んで携帯灰皿に捻り込み、乱雑に足を進めてそのまま「変なの」の頭を突くように小突いてみる。

ワンノック。

反応なし。

ツーノック。

唸って寝返り。

スリーノック。

『入ってまゝす…むにやむにや』という謎の返答と共に手を払われた。いや、別にトイレノックではねえから…。

もうこれで起きなきや放置しようと思いつつ最後の一発を握り締めた所で——「彼女」が跳ねるように起き上がったて怒号をあげ、俺の胸倉を天高く掴み上げた。

「こんこんこんうっせえわっ!! てめえはキツツキか!! そんなにウマ娘の頭に巣をつくるくらい暇なら有孔ボード製材のバイトを紹介してやろうかあ? ああんっ!!」

余りに圧倒的な膂力に、それなりに背がある俺の足をプラプラさせるほどの体躯。そして、完全な逆切れで血走った目にもはや解読不明な暴言。そのどれもこれもが関わった事を後悔させるには十分な要素なのだけれども——そのウマ娘は、そんなハチャメチャな言動の全てを覆すほどに美しく、息を呑んだ。

白銀に近いその長髪は陽光を浴びて金色に輝き、整った白磁の容姿は一切の汚れを含まず、均整の取れた肢体は彫刻がそのまま動き出したと言われても納得してしまいそうなくらいに完成されていた。

ルナも並外れた容姿を持っているがあつちを歴史と威厳を感じさせる名君の彫刻だとするのなら、こちらは美術館の最奥で嚴重に保管される絵画の様な神秘を感じさせる。

そんな彼女に目を奪われこと数舜、すぐに物理的に息が詰まって何とか声を漏らす。



「す、少なくとも、キツツキもそこまで暇じゃねえし……このままだと、クックロビンになりそう、だ」

「ああん……よくみりゃトレーナーか、お前。森で葬式するにはまだ早え、考え直せよ」

意外にもマザーグースの小ネタに反応しつつ今更な事を言つて彼女は乱雑に俺をほおり投げてまた芝生に寝っ転がった。せき込む俺をケラケラ笑いながら指さすその姿は完全にイカれてるが、それでも美人なので質が悪い。——そもそも殺しかけたのはお前だ、ばかやろう。

「げっほ、げほ………というか、もう選考会始まるぞ。行かなくていいのか?」

「んあー、なんていうかさー、どいつもコイツも全然おもしろくねーからやる気がでないんだよなあ」

恨めし気な俺の視線も何のそので笑うばかりなので俺も諦めて最初の目的を達成することにしたのだが、でっかい欠伸をしながら目の前を飛ぶ蝶々をめで追う彼女の言葉に首を傾げ——続いたその後言葉に絶句した。

「私より遅い連中と走っても、つまんねえだろ?」

「……はあ?」

過分にして、俺は彼女を知らないがこの学園が日本最高峰のエリアトが集まる修羅の国だという事だけは知っている。

地方で負けなしの神童や天才たちがココではただの凡才に成り下がり、生まれた頃からレースに全てを掛けて生きてきた本物の天才たちですら弛まぬ努力と信念、奇跡の果てにようやく栄光を掴める地獄。ソレがここ、中央トレセン学園だ。

それがトップリーグを駆ける前のデビュー前の生徒だってその本質は変わらない。

それら全てが今日の日の為に最高のコンディションで挑むのをあっさりと言う切り切る彼女の傲慢さと、それに対する負い目の無さが俺の中のひねくれ者の血をざわつかせた。

「——お前、さては友達いないな?」

「ははっ、あんた面白い事いうなあ。『友達』っていうのは自分より格下となる様なもんじゃないだろ?」

「確かに、『理ある』」

あまりに当然の事のように俺の皮肉にそう返す彼女が痛快で俺も思わずゲタゲタ笑ってしまう。

さてはて、さてさてさて、やはりここは天下の最高峰。

どれだけ目を凝らしても見つからなかった逸材がポロリと石ころの底に交じっているのだから恐れ入った。

この傲慢で、物狂いで、完全にイカれてる美しいウマ娘の言葉はモノを知らない愚か者が故の無邪気なのか、本当にそうであるからの厳然とした事実なのか——分からないが、分からないからこそ面白い。

どうせ馬鹿なら踊らにや損々。

ならば、この退屈そうな娘を精々楽しませるために俺も愉快的な道化として手を尽くしてやろうじゃないか。

「——いいぞ、お前が退屈しない様な最高のレースを今から用意してやるからついて来いよ」

「わははは、ツマらなきや覚悟してろよクツクロビン」

無邪気な笑顔の癖に目の奥の嘲りを宿したその眼に胎の底が冷え込むのを感じつつ俺は携帯を取り出して馴染の番号を呼び出したのであった、とき。

「おい、アンタ——最高だな。名前を覚えてくれよ」

「お前が俺の愛バに勝てたら教えてやんよ」

案の定、会場に戻れば誰も彼もが自分の出番を終わりその結果に悲喜こもごもしつつ結果に準じた次の交渉だのなんだのに移って先ほどとは違う熱気に包まれていた。

そう、『いた』という過去形だ。

今は誰もが凍り付き、息を呑んで俺と彼女。そして——ダート

に降り立った絶対なる「皇帝」に目を奪われている。

いつもの気さくで凜とした「会長」でもなく、俺や友人と会話する柔らかな麗人でもなく——あらゆる強敵の屍の上に立ち、全ての困難を粉碎してきた「絶対」と呼ばれた支配者として世界を凍らせる覇気を揺らがせ俺たちの前に「シンボルドルフ」が立ち塞がった。

デビュー戦すら経験していない娘の多くは力なくへたり込み、経験を積んだトレーナーですらこの異常事態に声を荒げる事も出来ずにただ道を譲り——隣のキチガイだけがこれから始まるパーティーの予感に武者震いをして喜びを露わにする。

そう、格下とはやる気が起きないというなら「格上」を用意してやるろう。

この国どころが、世界を見渡しても「抜きんでて並ぶもの」がない最上級の対戦相手だ。

幸いにも「選考会」が終わったこのダートの使用予定はなく、たまたま「俺」が「ここ」で「公開練習」をした所で誰に文句を言われる言われもない。なんならば、滅多に内容を明かさないう俺への嫌味も今日だけは存分にお答えして見せよう。ぜひ見学していつてくれたまへ。

大体が「選考会」なんてのもただのきっかけだ。

そういう機会を学園側が勝手に設けてくれるだけで「誰が、何処で」という規約なんてありはしないのだから——俺が勝手にこういう機会を設けた所で問題なんて今日この場ではありはしない。

そんな詭弁を脳内で弄しているウチにルナが俺の前に立つ。

夕日の光の加減で顔は見えないが、煌々と燃える盛るその瞳は明らかに怒っていて俺を射殺さんばかりに睨んでいるのは嫌でも分かった。

「こういったやり方は、感心しない」

「……考えて見りやお前に「トレーナー」として「命令」したのは初めてだな」

「ソレがこんな形で残念だよ——私に「未来ある後輩」を潰せと言うのだから、な」

そう吐き捨てるように言い残した彼女はそれ以上語ることはなく、重たい足音だけを残してゲートへと入っていった。

「……あれだけ俺の相方の機嫌を損ねさせたんだ、精々は俺を退屈させないでくれよ?」

「かーっ、溜まんねえや! 絶対にアンタの名前を聞きだしてやるから楽しみにしとけよー!!」

あの圧力を受けて未だにあんなヘラ付けるのだからやはり頭のネジがはじけ飛んでいるのだろう。だが、それでも変化はあった。

気だるげに、退屈に腐っていたあの瞳が子供のように煌めきを宿し、獲物を前にした肉食獣のように好戦的な炎を宿していた事は見逃さない。

そんな彼女が意気揚々とゲートに収まったのを確認して、苦笑を漏らしながら未だに固まっている群衆に振り返って声をあげた。

「梓は残り8つ、入りたい奴は勝手に入れ」

そんなに大きな声でも無かった筈なのだが妙に響くその声。

だが、それでも多くの娘達は処刑場に上がれと言われているかのようには顔を青ざめさせ後ずさり、トレーナー達は誰もが彼女達を守るかのように一歩前に出たが——それだけだった。

ふーむ、まあ、想像はしていたがこんなものだろう。ココで踏ん張れないならどのみちスカウトの時間暇をかける程でもないだろう、とゲートへ向かおうとした俺の横をスキップするように通り抜ける影が一つ。

「へへーん、ココで負けても無敗は守られるし、勝てば『皇帝』を『帝王』が超えたって事になるんだよね〜♪」

「おう、あくまでウチのただの公開『併せ練習』だからなあ」

ルナによく似た三日月にポニーテールを揺らす少女が鼻歌交じりにゲートに入ったのを皮切りに、数名の娘たちが止めるトレーナー達を振り切ってゲートへと収まっていく。

青ざめた顔と震える手足を抱えつつも顔を俯けない少女が

「ここで勝てば——私が一流だと証明できる」

決意を目に宿した少女が自らを奮い立たせ

「ココで逃げたら、一生、一番になんて手が届かない」

優等生然としていた赤毛の少女は怒りを隠すことも無く足を踏み鳴らし

「誰に断って頭を走ろうとしてんのよー！」

それを追うようにまた何バかが後を追うようにゲートへと収まり、杵は埋まった。

いやはや、噂なんてアテになるもんじゃないと思っていたがどうにも認識を改めなければいけないらしい。本気のルドルフの圧力を前にしてデビュー前で挑みかかれる意気地を持てるなんて並みの神経ではない逸材が少なくとも10バはいるのだから今年は気が抜けん。

まあ、ここに来た何人がスカウトを受けてくれるかは——また別の話なのだろうけれども、な。

そんな苦笑を零して俺は全員の体制が整ったのを確認して、乱雑にゲートのレバーを引き落としたのであった。

ウマ娘の蹄鉄の地響きが、夕闇に響き渡った。

昔から、退屈していた。

ずっと、ずっと退屈していた。

皆が苦勞する教本は一度見れば十分だったし、鍛えるまでもなく誰もががついてこれない事は走るまでもなく分かってしまったから。

ずっとイラついていた。

何もかもにイラついていた。

面白くもない事を寄り集まってはしやぐ奴らが馬鹿らしくて、弱い癖に纏まれば強くなったように勘違いしてる連中が小賢しい理屈を並べ立て歯向かって来るのがうっとおしくて。

だから、楽しむために、笑うために人生に趣向を凝らしてきた。

色んな事をやって遊び、色んな発見をして面白がり——口ばかり

の奴らを先に行かせてやって最後に抜き返して耳元で嘲笑って心を壊してやり、偉そうな口を叩くやつを嘲笑って暇を凌いできた。

ムカつくもの全てを蹴散らして、思うままに生きているウチに随分と周りは静かになって昼寝をするには随分と丁度良い環境になってきた頃にこの学園に厄介払いされるかのように送られてきた。

最初は期待したが——無駄だと悟ったのはわりかし早い時期。

同級生も、上級生もなんならばレースに出る選手たちですら大した事は無いと思つて再び暇を潰し、惰眠を貪る日々を送ってきた。

だけれども、人生はやっぱ捨てたもんじゃない。腐らず真面目に生きてきた私の行いは神様はしっかり見ていてくれたらしい。

今、目の前に立つのは観客席や全校集会で見た気の抜けた炭酸の様な「カイチヨ」とやらじゃなく、世界に名を馳せた「本気」の「シンボリドルフ」。

鬼だろが悪魔だろが踏み殺す自信のある私が、一回りも小さな彼女を前にして胃が締め付けられ、心臓は跳ね上がって、体は勝手に震え上がろうとする。

初めてだった。初めての経験だった。

そうか、コイツが「怖い」って奴かよ。

ははっ、凄いな。そうか。みんなやつぱりズルいぜ。

こんなに心臓が高鳴って、体が震えて——「生きてる」感触を毎日味わってたなんて羨ましいし、妬ましいじゃねえかばやろう!!

そんな私は脳にまで響く胸の高鳴りを抱えたままゲートに入り、続々と入ってきた他の奴らの顔を見渡す。

あー、いいじゃん。みんな、私と一緒にだな。心底ぶるってんのに、絶対に引きたくない「ナンカ」の為に——「生きて」やがる。

そのもう一個向こうに見えるおっかない世界最高だけが誰にも目もくれずまっすぐ前を見つめて、熱い呼吸を漏らしているのを見て胸の奥底に更に火がついて行くのを感じた。

なあ、あんたくらいになれば——私も毎日こんなにワクワクして生きれっかな？

アンタをゴール手前で抜き去ったら——どんなに気持ちいいかな？

ゲートが開き、一斉に影が走り出す。

皇帝はまるでそこだけオイルでも塗りたくってんのかと思うくらいに静かに、滑らかにぶっ飛んでいく。誰も彼もを置き去りにしていくような走りに食らいつく赤いツインテールの女が頑張るが——経験か、鍛え方の差か第二コーナーを超えた辺りからバテ初めてグングン離されて行く。

それを飲み込むようにバ群がスピードを上げ、何人かが捕まえようとするが全然ダメだ。

一步、二歩と踏み出していくたびに飛ぶようにその飛距離を伸ばしていくアイツに対して同じ歩幅で必死に足を回しても届くわきやないだろ？

この中距離も後半に近づいて、誰も噛ませ犬にできない事が判明したのでしようがないので自分でいく事にしよう。

ここまででもハイペースにぶっ飛ばしてきた他の奴らの集団は伸び切って私の走りに邪魔になる奴もいないし、あれだけ先頭を走ってんなら最後の伸びも知れている。

少なくとも、前に見たアイツの「最後」の走りではこれ以上はない。

ならば————余裕で、抜き返せる。

足に力を籠め、肺の空気を絞りだして、血を燃やす。

一步で地面が抉れて吹っ飛び、二歩目で景色がぶっ飛んだ。

風が急に構って欲しそうに体を擦るが押しつけて、一点だけを見据えて他の全てを置き去りにする。

ほら、一人ぼっちは寂しかったろ？

この私が、遊びにいつてやるからもうちよつと辛抱してくれよ？

他の奴らをおつという間に追い抜いて、アイツの背中まであと数歩。ゴールまで300もない。だけれども、私の足ならばよつゆうのよつちゃん。ごめん、うそついた。肺も潰れそうだし、汗で視界も怪しいし、体中が悲鳴をあげてる。——でも、追いつけるのは嘘じゃない。

「まつ けつ るつ も ン」 があああつああああつ!!!」

絶叫に近い雄たけびを上げて、栗毛のちびが並んできた。いつもなら歓喜する所だが今はお前じゃない。

ひっこんでろ、今日は、私の日だ!!

私も更に気合を込めて地面を蹴っ飛ばし更に加速する。ほれみろどうだおいついた!! 皇帝がなんぼのもんだ、私がきょうからつぺんだみたかばかや——「大したものだ。だが、貴様が思う程にこの道は甘くない」——ろう？

並んだルドルフが、並んでいたはずのルドルフが——私の横から掻き消えた。

たった10mもないそのゴール前で、彼女を見失い唾然としているウチに全身を叩くような歓声が響き渡り私はその結果を眼で見るともなく悟ってしまった。それでも信じ切れずに前を向けば——2バ身も離れた所でルドルフがゴールを駆け抜けていく光景。

そんな訳は、ないはずだった。

暇つぶしに見ていたレースで彼女の限界は確かに見極めていた。

アレが彼女の余力なんてない、全力だったはずだ。

追い越せるはずだった背中を拝む羽目になったのは、信じがたい事に——第一線を退いた彼女は今もなお早くなっているという単純な事実。

続々とゴールしていく他の娘達に意識を向けることも出来ずに私は

人生初めての“敗北”を 噛みしめた。

どうにも、何かに負けるってのは——随分と悔しいという事を私は今日初めて知ったらしい。



## || 今日の蛇足 ||

会場中が歓声に湧く中でいつもの様になんて事は無いように、それでもその声援が嬉しい事を伝えるように笑顔で手を振り答えるが私の内心はドツキドキで、体中は無茶に無茶を重ねたせいで泣きたいくらいに悲鳴をあげているのを気合で乗り切っていた。

そもそもが困惑気味のたずなさんからココの予約を彼がとつてきたと報告を受けた次の瞬間に電話で「今から走れ」なんて呼び出されて今に至るのだからコンディション管理も準備も全くなし。それに、いくらデモンストレーションとはいえ私の立場も考えない彼の横柄な要望には流石の私もカチンと来てしまう。

怒ってるぞ、と態度で示して後でたつぷり償い（デート）をさせてやると心に決めたままでは良かったのだ。むしろ、最近レースが無くて二人の時間が取れなかったのでもいい口実だとすら思っていた。

なんなら新入生たちに手心を加えて惜しい戦いを演出する事で激励になるかも、と打算と下心があったのも確か。

それが蓋を開けてみればどうだ？

コイツら、本当にデビュー前か??

というか、最後に追い上げてきた二人は本気の本気に無茶まで重ねなければ本当に負ける所だったぞ??

片方の地団駄を踏んでる子は昔からの縁があつて分かりはするのだが、呆然と立つてこちらを見ている葦毛の子は記憶にない。あれだけの實力を持ちながらなんで私の所に報告が上がってこないんだ……。

これが中距離の2000mだったから良かったものの、あの勢いだとそれ以上のレースだと本気で食われていたかもしれない事を思えば背筋が凍る想いだ。

マジで勝ててよかった。あんなカッコつけといて負けたらマジで明日から引きこもる自信があるぞ……。

「お、お疲れさん。悪いな急に無茶言つて。それと今のタイムは20

00mの日本記録達成タイムだったぞ?」

「……比企谷、ちよつと二人で話そうか?」

「へ、ああ、まあちよつと今からスカウトしてくるから——あ、あれ、ルナさん? ちよ、ちからつよつ、あ、あああつ、かた、かたの肉千切れちやうよおおおおあだだだだ!!」

「うんうん、言いたいことはじーっくり聞いてやるとも。ああ、——じっくり、な?」

なので、ヘラヘラとそんな事を言っただけで近寄ってくる大馬鹿者に私が今から思いつきお説教を喰らわせ、ボコボコにするのも実に正当な故があつての公明正大な判断に元づくものなのである。

情けない彼の叫び声と、私の地面を踏みしだく足音と引きずる音が夕焼けに深く木霊したとか、しないとか。

ちなみに、後日、理事長から日本記録のメダルが贈られた。

全然嬉しくない。

『“ちーむ”の始まり』

緩やかな温もりを感じさせる春の季節も少しだけ湿り気と草花の猛る初夏を予感させる梅雨時期に差し掛かった頃の事。街並みは桜の見頃を過ぎて新緑の眩さが目立ち、待ちゆく人々も活気だつ様子を横目に久々の“パートナー”とお気に入りの喫茶店で優雅に午後のアフタヌーンティーを楽しむ。

たまにある完全休暇日での自分の心身を癒せる貴重なこの時間を私はとても気に入っている。

いつもは事務的なトレーニングについてか、学校で起こる様々な事に頭を悩ます会話で緊迫感溢れるモノとは違って見に行つた映画の感想やどうでもいいよもや話、偶然に目に入つた光景から始まるお互いの持論の交換は世間知らずな私には新鮮で、興味深く——彼をまた一つ深く知れたという喜びで満たしてくれる代えがたいルーティンの一つであつた。

そう——“あつた”である。

「えー、では、僭越ながら『第一回チーム『コルヴィス』ミーティング』を始めさせて頂きたいと思ひます。進行は僭越ながら生徒会副会長である私“エアグルーヴ”が務めます」

「……なんで君がココにいるんだ、グルーヴ？」

「？ いえ、スカウトに失敗したコイツのせいで実質的に私と会長しかメンバーがいませんので順当な面子かと……」

そうじゃない。そうじゃないだろう？ 別に今日はミーティングの為の時間ではないんだよ、グルーヴ。

デート。そう、デートなんだ。

何なら逢瀬と言ひ換えてもいい。

日頃にお互い時間がない私と旦那の数少ない機会になんで君が混じっているのかと聞いているんだよ。頭わいてんのかい？ というか、確かに。確かにあの名簿の中で彼のレッスンに堪えられるのは君だけという事で丸め込まれつつも加入を認めはしたがね……こういうプライベートな時間には踏み込まない分別があると思つたからソレ

を認めたというのを忘れちゃったのかな?!

「ぶつころすぞ、お前」という私の殺意を受けているにも関わらず手持ちのホワイトボードに悠々と文字を書き込んでいく彼女。そんな力オスな空間に気だるげな声が割って入る。

「……………なに、あの入部宣言ってドッキリとかじゃなかったの?」

「何を言っている。今まで実質的なメニューを決めていたのがお前なのだから無駄を省くにはこうするのは当然だろう。他の娘たちももう少しだけ身体が出来上がってからの加入になる。そこからはこんな悠長にはしてられないぞ?」

「あの冗談みたいな名簿はどうかドッキリであって欲しかった…………」

「ふんつ、チームを持つという事はそういう事だ。大人しく観念しろ——まあ、私も出来る限りはサポートしてやるから精々気張ることだな」

「俺よりお前の方がトレーナーにむいてるんだよなあ…………」

……………おい、なに嫁を差し置いて別の女とちよつといい雰囲気です苦しめるんだ、比企谷。

ぶつころすぞ?!

「というか、今日のデートがああ『選考会事件』の穴埋めなのを忘れない?」

君が急に「今から走って、後輩を潰せ」とか言うから頑張ったのになんで私はこんな光景を見せられてるんだ。しかも、あのあとに理事会に呼び出されて飄々と受け答える君と一緒に怒られたり、庇ったりしたのは私だぞ? その埋め合わせに今日は思い切り甘え倒してやろうと思っていたのに、なんでこんな事になる?!

いや、今からでも遅くはない。遅くはないんだ。シンボリルドルフ……………。

旦那との甘いひと時は、今からでも取り返せるはずだ。

がんばれ、ルナ。お前は強い子だ。

皇帝を無礼なめるとどうなるか見せつけてやるんだ!!

「エアぐる……………」

「あつ、ようやく見つけましたわっ!!」

「んだよ、スカウトしてきた癖に放置プレイとか上級者向けすぎるぜクックロビン!」

「あ、おね…カイチョーと副カイチョーもいるー」

「なんでチームの部室とかじゃなくてこんな所でミーティングしてんのよ……」

力強く机を叩き、上下関係を改めて叩き込んでやろうと息を吸い込んだその拍子に喫茶店に雪崩れ込んできた騒がしい一団のせいでタイミングを逃してしまった。

ガヤガヤ、ズカズカと周りの迷惑も考えずにこちらに近づいてくる顔ぶれは先日の選考会で並んだ面子で、嫌でもこの後の展開が分かっ  
てしまい更に眉間に皺が寄ってしまふのを止められない。

ああ、一体わたしがどんな悪い事をしたって言うのか？

何で大切なパートナーとの貴重な逢瀬を踏みにじられなければいけないのか？

勸善懲悪のごとく生きてきた私が、なぜ懲らしめられなければならないのか？

そんな私の天への必死の訴えも空しく、予想された残酷な言葉は彼女の口から容赦なく紡がれたのであった。

「ニアンタ（君）（貴方）（お前）のスカウト、受けるわ!!」

がつくりと肩と耳を項垂れさせた私を、三始祖神が笑ったかのよう  
に風が尻尾を撫でていった、とき。

昼時の眩い初夏の太陽もとつぷりと沈み込んだ夜の事、俺はようやく流し込めた麦酒の苦みと旨味に喉を鳴らせてようやく肩の力を抜くことが出来た。

いつもより早いペースで流し込んだせいか、はたまた溜まった疲労

のせいかじんわりと回り始めた酒精の酔いが広がっていくのに身を任せながら最近の出来事を思い返してもう一度ため息を吐き出す。

あの選考会からすぐさま開かれたトレーナー全体会議や理事会の偉い人や同僚から非難轟々に攻め立てられた数時間をのらりくらりとやり過ぎし罰則から逃げきれたのは良いのだが、ただでさえ嫌われ者の俺のヘイト値は更に高まり、今後はああいう事が起こらないように全会一致で禁止されてしまった。

なんでも「公平な機会の損失に繋がる」のだそうなの。

まあ、またやるつもりもないので一向に構わないのだけれども疲れたのは確かである。

更に言えば、そこまでやったのにあの後すぐ、ルナにお説教を喰らってしまったせいでスカウトをすることも出来ずにただの骨折リ損だったのが疲労感に拍車をかけた。いや、ホントに何のためにやったのか意味わかんなくなっちゃうよね？

そんなゴタゴタの内にルナに貴重な週末に予定を入れられ、「女帝」がシレつと他の書類に混ぜ込んで入部届の書類にサインをさせて入部してたりと忙しい日々を送る内にあの事件はあつという間に流れていつてしまったモノだと思っていた——のだが。

ビールを片手にツマミの枝豆を齧る俺の手元には不思議な事に4枚の入部届がある。

昼のルナとの外出中に乗り込んできた4人組。

あの傲慢な葦毛の娘の他にもかのレースに乗り込んできた命知らず共。

そいつらの名が書き込まれたその書類を眺めつつ、物好きな奴らだと思わず苦笑を零してしまうのは酔いのせいかな、単純に愉快な面子にありもしないトレーナー魂がくすぐられているせいか判別は難しい。まあ、あの後に大層「機嫌斜めになったルナに明日会う事を考えると頭も痛くなるのだけれども……」ともかくにも、俺の無茶は小さな結果をもたらしてくれたのだから今は素直に喜ぼう。

「何にやけてんの、気持ち悪い」

「おう、久しぶり。……何のむ？」

「ウーロン茶」

そんな俺に掛けられた冷え冷えとした声。その久しく聞く遠慮のなさや冷たさが心地良く感じつつもこっちはジョッキを掲げるだけの簡単な挨拶で返し、適当に酒を勧める。だが、どうにも呑む気はないらしく素っ気なくそういつて彼女は席に腰を下ろした。

「下戸だったか？」

「アンタに急に呼び出されて警戒しない訳がないでしょ」

その無遠慮さが今はいつそのこと清々しくて今度こそ声に出して笑ってしまった。

それを気味悪げに見つめる青みがかった髪をポニーテールに纏めた元同級生「川崎 沙希」は昔と変わらずに人を寄せ付けない伶俐な雰囲気湛えている癖にこういう風に呼べば答えてくれる律義さは変わらない。ソレがこの業界に辟易していた自分には小気味がよくて、新鮮に感じてしまう。

「ま、そりやそうだな……まあ、用件を話す前にもう2、3人来るから少し待っててくれ」

「はあ？ あんた、今度は何企んでるの？」

「別に大したことじゃ——」「八幡、お待たせ!!」いや全然待っていないしむしろ急に呼び出してごめん。迷惑とは分かってんだけどどうにもこういう時に頼れるのが——」

「あれー八幡？ 我もいるんだけどー？ あれあれー、対応が違いすぎない??」

「俺達、帰ってもいいよな？」

「いや、まじこの人と関わると毎回酷い目会うんだよな……」

「あ、来てたのお前ら。うん、まあ、適当に座れよ。呑んでもいいけどダルがらみしたらはっ倒すからな？」

「「コイツ、変わらざクズだなっ……」」

川崎の問いに答える前に俺の耳に届いたエンジェルボイスと目が潰れてしまいそうな程に眩い笑顔で手を振るマイフレンド「戸塚」をもてなす為にあれこれと席を引いたり、おしぼりを差し出す後ろから聞えるモブ共の不満げな声。

呼んどいてなんだけど、コイツ等の扱いはこれくらいで良いのが楽で非常に助かる。主におれの精神衛生上の理由で。

そして、文句は言う癖に人の奢りだと分かってるせいか次々に高い料理を頼んでくのも罪悪感を感じさせない小物臭を漂わせていていやがるぜ!!

そんな懐かしの面子が揃い一気に騒がしくなった卓に——もう一つ、懐かしい声が響いた。

「ヒツキー　　また、私達を頼ってくれるんだね？」

からかいと、慈しみと、かつて過ぎ去ったあの教室での日々への郷愁を掻き立てる柔らかかな声。それに籠められた思いに緩みそうになる涙腺を引き絞り、俺は精一杯にいつもの様に頬を引き上げ——皮肉気に口づさみ

「ん、今回もいつもみたいに”手を貸してくれ。この通りだ」

揃った悪友たちに深々と頭を下げたのであった。



俺んところこないか？

「んーでっ、なんで私達は今回よばれたの、ヒッキー？……うわっ、このからあげおいしっ。沙希も食べる？」

「いや、自分で取るからいいってば。……くだらない用事だったら即効帰るからね」

「かっかっかっか、タダで飲み食いする時ほど甘美に感じる食卓もあるまいて!!」

「この人無駄に美味しい飯屋知ってるから侮れないんだよ。おい、お前はさっき二つ食ったろ、それー」

「どうせ奢りなんだからまた頼めよ。それに釣られて毎回、無茶に巻き込まれてんだよなあ……」

「あ、あははは、皆とりあえず落ち着いて食べよ？」

夜も更けて来て賑やかになってきた店内の中で、人の話を聞く気があるのかないのか夢中で届いた料理と酒に舌鼓を打って盛り上がる彼らの代わり映えの無い姿にちよつとした呆れと懐かしさを感じつつ箸で空になったお通しの皿を叩いて一旦こちらに注意を惹きつける。

「えー、この度はご多忙の中お集まり頂き「それ以上長くなら帰るか」……はいつ、という事で簡潔に行く。——今度、職場でチームを持つことになったので、その運営メンバーとしてお前らを引き抜きしたい。急な話で悪いんだが月給はざつとこんなもんだ」

「……ほえ？」

「見してっ！」

俺の口から発せられた言葉の意味に誰もが愕然としている中——瞬息で椅子から立ち上がりその雇用条件が記された紙をもぎ取って穴が開くくらい読み込んだのは意外な事に川崎だった。

何度も何度も指追い確認していくその姿に唾然としていた他の面子もおそろおそろその紙を覗き込んで目を丸くする。

「ひ、ヒッキーこれ額まちがってない!? 手取りがすんごい金額になっちゃってるよ!!」

「中央トレセンは高給取りって聞いてたけど……みんなこんな給料貰ってんのかよ」

「いやまて、相模氏。この男の事だ何か裏があるに違いない間違いない。義輝それで何回も痛い目みてるから騙されないもんー!」

「いや、でも、雇用条件は確かにきつめだけど今のブラックと違って残業代も開発成果も自分の所有物だって明記されてるぞ……(ゴクリッ)」

「えつと、でも、これ雇用者がトレセンじゃなくて——八幡個人の名義になってる?」

「へ?」

紙を覗き込んで見た事も無いような雇用条件にあわあわとしていた面子が戸塚が呟いたその一言によく見逃していた重要事項に気が付き、ようやく俺の方へと視線を戻して問いかけてくる。

そう、ここからが——本題で、勝負のしどころである。

視線の圧力と緊張に少しだけ乾いた唇を麦酒で湿らせて一つづつ順を追って言葉を重ねていく。

「戸塚が言った通りその契約書の契約者は俺個人になる。そもそもがこう言った『チーム』が新たに設立された時点で専属トレーナーはウマ娘の指導以外の大量の仕事が増えるからこういったサポート人員を集めるのが普通だ——慣例通りなら『トレセン学園の関係者』からな」

「……まあ、普通はそうであろう? というか、我らはお主みたいにトレーナー専門校を卒業もしていないしウマ娘との関りも一般と変らん。雇うなら造詣の深いものを雇った方が早いに決まっておる」  
そうとも。材木座の言う通りだ。

だが、残念ながら俺はあの職場に置いて一番厄介な問題を抱えている。

「俺は担当のお陰もあるが、凄まじい出世をってしまった訳だ」

「……いや、唐突に自慢はじめたな、この人」

「たまにいるよな、聞いても無いのに延々と自慢する奴」

「喧しいぞ、ゲーム研。……それで、ここからが本題なんだが——職

場で同僚関係ではすつごく嫌われている」

「「……………ああ」」

たったその一言で全員にも凄く納得されてしまうのは悲しむべきか、怒るべきか悩みどころだけれども俺の周りにいたこいつ等にはある意味お馴染みの環境なので一番理解が早い説明だろう。

嫌われ者のチームに入って針の筵に座りたがる人間なんてまずいないというのもあるが、トレーナー業というのはそもそもが守秘義務の塊だ。

トレーニング内容は勿論の事、ウマ娘たちの身体カルテやプライベートの事情、多額の賞金の運営管理、機材に、スポンサーとの交渉、メディア関係。それこそ数えればキリが無いがソレが一つでも漏洩していれば大問題。だが、一人で管理をしきることなどは出来ない以上は信頼のおけるサポーターをつけなければならない。

それは、普通ならば就職時に守秘義務の契約書に同意しているトレセンの事務員や教官の中だったりから選ぶのが普通に考えれば最適解といえる。

だけれども——裏切られればソレは担当のウマ娘共々に全ての終わりを意味する。

少なくとも、あの学園の同僚関係でそんな命綱を託せる人間を俺は知らない。

だから——知識が薄くとも、経験が薄くとも、俺は例え裏切られても後悔のない人間にその命綱を託したい。

そんな俺の我儘からのヘッドハンティング。断られても、それはそれでいい。

その答えは

「最速で今の派遣辞めて来週から出勤すればその分の給料は日割りでいいんだよね？」というか、給料が嘘だったらマジで殺すからね？」

「まあ、今の開発会社でも使い潰されるだけだしなあ…………」

「というか、今までもバイトで結構な開発させられてるし…………今更そんな変わらんでしょ」

「むあつはつはつは、就活に失敗してバイトに身をやつして雌伏して

いたのはこの時の為よ!! とうか、マジでありがとうございます神様仏様八幡大菩薩様!!」

「うーん、今までも八幡の担当さんの施術はさせて貰っていたから僕はいいんだけど……新しい担当さん達がOKしてくれたら専属にならせて貰おう、かな?」

「ヒッキー! あたし、頑張るねっ!!」

俺の予想に反してあっさりと誰もが首を縦に振ってしまふ。

腹の探り合いも気疲れする思考の読み合いも何も無い、いつそのこと何も考えていないのではないかという程に軽やかに返されるその返答は呆れるくらいに目的も思いも単純。『条件が良くて、都合が良くて:まあ、腐れ縁もあるしいつか』くらいの気楽さで決められた人生の選択はめんどくさい思考回路を持つ俺にはない清々しきがある。

だから、きつと俺に無いもので彼女・彼らは抜けた穴を埋めてくれる。

手を取り合うのは、膝をつき項垂れている時ではなく、同じ方向へ進む時にこそ結ばれるべきだろうから。

前途多難、不安マシマシのトレーナー人生だが、まあ、こうしてカラカラと『転職にかんぱーい』などと何事も無かったかのように騒ぐこいつ等を見ていると何とかかなりそうな気がして——俺も小さくグラスを掲げて澄んだ音を店内に響かせた。

|| 蛇足という名の人物紹介 ||

由比ヶ浜 結衣 (25)

高校卒業時に猛勉強と親友の熱血指導により奇跡的に看護学科に入学(親友・両親・担任は合格発表で号泣した)。その後は養護教諭の資格等を取り、各高校を巡り歩きカウンセラーとしての経験を重ね今に至る。

生徒たちからは同世代やカワイイおねーさんという親しみを込めて『ゆいちゃん先生』と呼ばれ大変に人気だったそう。

川崎 沙希 (25)

無事に国公立大学に進学したは良いのだが就活時期がちょうど就活氷河期だったこともありギリギリ入社。そして、そこでセクハラ上司を思い切り蹴り飛ばしてしまった為にクビとなつて、派遣の事務職で食い繋いでいた為にとても心がささくれている。

家族のために彼女は今日も頑張るのだ。

戸塚 彩加 (25)

テニスで才能開くことはなかったが、多くの部員に親身になってケアしていた経験からスポーツ医学の道を志し整体師&ケアマネジャーへジョブチェンジ。開業したばかりだが腕もよく、人柄と可憐さから顧客は人・ウマ娘問わず結構多い。ルドルフとも唯一すでに接点がある人。

とつかわいい。

材木座 義輝 (25)

大学を出たまでは良いがコミュ障と中二感が抜けず、就職氷河期も合わさり就職に失敗。色々バイトしたりしなかったり、小説を書いたり書かなかつたり、見事にワナビとして引きこもりの道を歩んできたが、ようやく雌伏の時は終わり剣豪將軍復活。

最近、両親の目線がモノすごく辛いらしい。

相模くん (24)

プログラムの会社に入った社畜。頭がいいし有能だが、根暗で小賢しい為に大悪党にはなれずに搾取され続けていた。たまに来るゾンビみたいな先輩からの開発バイトはいいお小遣い稼いだつたらしい。姉がホストに嵌りそうで大変らしい。頑張れ。

秦野くん (24)

技術系開発職の社畜。結構に凄い技術力があるのに開発したモノ

は全て上司の名前かチーム名義になっている摩訶不思議な現象が起こつていて怖さと怒りで眠れない日々。たまに来るゾンビみたいな先輩からの開発バイトはいいお小遣い稼ぎだったらしい。

最近、出会い系アプリの怖さを知ったらしい。写真加工ってしゅごい…。

「んっぐんぐ——ぷはっ、人のケツ触った奴をぶん殴ってなんで私がクビになるのよっ！ ふざけんな!!」

「か、川崎さん、ちよつと飲みすぎじゃないかなあ?」

「なんで僕しか残業残ってないんだよおかしいでしょ、てかほとんどの仕事が全部他の奴らのじゃん? おかしくない? 苦労の押し売りはなんでクーリングオフが効かないの?」

「わかる。そしてどれだけ頑張った結果も最後は全部持ってかれるんだよなあ……。お前らがやったのってほぼ耐久検査とか黙って見るだけの奴じゃないっけ?」

「ぬはははははっ……え、社会こわっ。我、就職できなくてももしかして正解??」

ガヤガヤ、わちゃわちゃと川崎が酒を開けてから一気に加速した飲酒量と比例するようにテーブルには会社や現状に対する愚痴が止めどなく溢れ出す社会人呑み会あるあるな光景が広がる魔境となってしまう。

そんな光景を呆れながら眺めていると同じように苦笑いを浮かべた由比ヶ浜が隣にやって来て小さく杯を交わした。

「あ、あははは、みんな相当溜まってたんだねえ。みんな昔のヒツキーみたいな事を言ってるのを見るとなんだか複雑な気分だよ……」

「馬鹿言うな。今でも俺の主張はあの時と変らん。変らんが……あそこまで荒れられると自分の方が冷静になっちゃうレベル」

「いやっ、ソコで急に冷静になるのはもはや裏切りじゃん!」

「あいたあ」

ベチリと肩を叩かれた拍子に彼女の柔らかかさと、柔らかなサボンの香りを感じつついつもと変わらぬ茶番を繰り返す。そんなお決まりの流れに二人揃ってクツクツと笑いを零していると由比ヶ浜はゆるりと微笑んで言葉を紡ぐ。

「でも、頼ってくれて嬉しかった。きつと、皆もそうだよ」

「言い損ねてたけど……正直、助かる」

「うん、どういたしまして。——ゆきのんにもそれくらい素直になればいいのに」

「……………いろいろあんだよ、大人には」

「うわあ、ヘタレだなあ」

子供のようにそっぽを向いて誤魔化す俺に、ケタケタと指さし笑う彼女。そんないい歳した俺らのガキ臭いやり取りが妙にくすぐったくてむずかゆい。

さてはて、これ以上に話題が不味いものに転がらない内に酒瓶片手にあつちの卓に交じって誤魔化しにかかるため俺はずりずりと酔いで重たくなった腰を持ち上げたのでした、とさ。

## 測定

「えー、という訳で新規事務方および新メンバーを迎えた体制でこれからのチーム運営を行っていくのでよろしく。んじゃ、早速だが

「ちよつと待て」 ……はい、シンボリルドルフさん」

麗らかな風に差し込む日差しが眩しい真新しいミーティング室に呼び集められた私達の前に並ぶのは見慣れない顔ぶれの人物たちと、たまーにパートナーが休暇明けに漂わせていた女人と同じ匂いだと思しき女性が2名。

それだけでも頭が痛く湧き上がる苛立ちは隠しきれないのだが、一人だけ整体師として面識のあった戸塚氏以外は全く見知らぬ人間たちを事務方として急に雇ったと言われて納得しろというのはいくら何でも私も堪忍袋の緒が切れかけている。

「比企谷、君はいま自分がどういう事をしているのか理解しているのか？」

「……まあ、大体はな」

隠すことも無く足で地面を搔いて苛立ちを伝え、普段の緩さを抜いた真剣な私の問いに軽薄な笑みを返すだけの不実さに最後の一线は簡単に切れてしまった。

「——これが『そんな事』で済むと思うなっ!!」

荒々しくその胸倉を掴み上げ、思い切り壁に彼を叩きつけた。

人とウマ娘の身体能力の差を考えれば、決して許されない行為。

ココに集められた者全てが息を呑み、悲鳴をあげるが——私の剣幕に圧されて誰もが声をあげる事以上の事は出来ない。

だが、構うものか。私にだって我慢の限界はあるのだ。

それが、最愛の男の人生に関わるモノならば彼に嫌われたって私は声を上げない訳には行かないのだ。

「お前はこの『トレセン学園』にいるもの全てに喧嘩を吹っ掛けたのだぞ！ 今までの様な故あっての嫉妬や顰蹙ではなく数少ない公平な目でお前を見守ってきた人達へ歩み寄る最後の機会を全てドブに捨てたのだ！ 他方から引く抜くのも有効な策だ。機密保持にも最



善手だというのも分かる。だが、誰も学園側から入れずにチームを編成するという事は——「誰も信用していない」とそう名言したも同然の行為!! ソレが分からないお前ではないだろう!!」

それは、彼の今後において余りに致命的な傷になる。

人も、ウマ娘も個人ではどんなに足掻いても遠くへは駆けてはゆけないのだ。

それが周り中を敵に囲まれた最中でなど論外だ。

何より——「私達はずっとそばにいられない」。

今回の新規メンバーがよしんば結果を出した後、引退したのちに彼への迫害はより強くなりトレーナーをココで続けることなど不可能になることは予想に難くない。

そんな孤独の道へ自ら進もうとする「パートナー」の目を覚ます為ならばいくらかでも私は嫌われて構わん。彼がこの先に多くのウマ娘の才能を開花させる未来に比べれば私個人の胸を裂くような訣別など構うものか。

彼の才能を知っているからこそ——私はココで引くわけにはいかないのだ。

「今からでも遅くない。理事長に掛け合い学園側から信用できる人物を斡旋してもらえ。最初は上手くいかないだろう。お前の指導法は余りに特殊で苛烈で、極端だ。軋轢も反感も当たり前前に起こって諍いだって生まれる。だが、その分かり切った結果をしてもなお、少しずつ進めなければならぬのだ——度量を見せろ、比企谷」

「——かふつ、その無駄な時間で俺はコイツ等を天辺に連れてける」その咳き込み掠れた声。だが、何処までも響く冷たく重い声が私の脳を、いや、ここに居る全員の脳を強く叩いた。

「俺の未来なんか知るか。誰にも疎まれ、善意が裏返ってばかりの人生で今更そんな見知らぬ「誰か」なんか知った事か。俺は、俺が関わって人生歪めちまった奴のフォローで精一杯だ。俺以外のそいつらが輝けるのなら他の全てを泥に染めてやる——だから、お前も俺なんか気にせずただ進め。それだけが、俺の存在価値になる」

「——本当に、愚かな男だ」

昏く、それでも揺るがない灯で私を睨み返す彼に深く、ふかーく嘆息を漏らして私は彼の胸倉を手放した。

「あでっ。……まあ、愛想が尽きたらいつでもお前も離れて行っついでいい。妙な義理なんて感じる必要ないぞ？」

「君への愛想なんてとつくに尽きているとも。それでも一緒に居るのは……まあ、パートナー」だからだろうなあ」

「俺の知ってるパートナーへの目線はもう少し柔らかいもんだと思うけどな」

減らず口を叩いて起き上がる彼に少しだけ眉を寄せてしまう。コレが世間一般では」

惚れた弱み”という事を彼は分からないらしい。その愛憎入り混じる感情をモヤモヤと今日も飲み下しつつも呆然と私達を眺めている。『新たな仲間』に今更な体裁を整えて挨拶を交わす。

「身内のゴテゴテをお見せした後では少し気恥ずかしいが——初めまして、同胞よ。私の名前は『シンボルドルフ』。彼のパートナーで、このチームのエース。それにこの学園の生徒会長なんても担わせて貰っている。浅学菲才の二人ではあるが、これからもどうかよろしく頼むよ」

さつきまでのいざこざをがまるで無かったかのように優雅な礼を行う私に、誰もが引き気味な笑みを浮かべて曖昧に頷いた。

失礼な。

「……結局、これって夫婦の痴話喧嘩を見せられただけなの？」

「まあ、喧嘩するほど仲が良いってよく言うもんだよ♪」

「喧嘩するほど仲が良い、ってのが過去の偶像というのはゴルシ星じやもはや常識だぜ？」

「……まあ、よくあることだ。気にするな」

「初回ミーティングからこの混沌具合……一流とはかけ離れてますわね」

先日の喫茶店で入部届を出して数日。諸々の準備が整ったので部屋に集合というメールを受け取って意気揚々と集まったはいいモノの見せられたのはあの生徒会長の見た事も無い怒りを滲ませてトレーナーに掴みかかる惨事と、謎の和解。

新設チームという事で悩みに悩んだ自身の結論も流石にこの有様ではいくら「キングヘイロー」たる私でも選択ミスという言葉が脳内をチラついて頭を抱えそうになる。

あの日、震える体を押さええて走った時の衝撃。

同じ場にいるだけで全てのウマ娘を恐慌状態に陥れた「皇帝」になけなしのプライドで何とか出走したモノの自分など歯牙にもかけられる事は無かった。

体が強張っていたのも最初の1000mだけ。その後は集中を取り戻して自分の最速で駆けたあのレース。選考会でほぐれていた体は最高潮といってもいいくらいだったにも関わらず皇帝どころが同期の二人にも大きく離され完敗を喫したのだ。

だからこそ、ここに入部する事に決めた。

負けるのは、いい。

だが、負け続ける事は許されない。

だって、私は「キング」なのだから。

その自らの誓いを遵守するためココの門を叩いたというのに、コレでは先が思いやられる——などと早々に転部を視野に入れて思考を深めているとヘラヘラ何かを会長と話していた「トレーナー」が何事も無かったかのように立ち上がり、コチラに目を向けた。

ジトリ、とした嫌な感触はこの男の視線だろう。

それに怯むのも癪でむしろ見せつける様に胸を張って、腰に手を置き見詰め返してやる。

一流とは、どんな視線にも恥じる事はないのだ。

「ゴタゴタしてすまん。それじゃ、最初に測定に移る。これで今後のメニューも決まるから全力で取り組んでくれ。それと……これから

のトレーニングは必ずコレを着て臨んでくれ。詳しい説明は測定の後」

彼が眼鏡の男二人組に目配せして配らせたのは一見して普通のトレーニングタイツ。その少し厚手の生地がそれぞれに妙に各体型に合っているものでいらぬ懸念が脳裏によぎる。

「「「……こういう趣味？」」」

「アホな事言つてないでソレを体操着の下にさっさと着込んで第4ターフに集合しろ」

呆れたように溜息を吐いた彼がそれだけを言い残した部室を後にした。

……まあ、今日くらいはお手なみ拝見とさせて頂きますか。

そんな嘆息と共に私達は更衣室へと移動したのであります。

「——えっほ、うえっ、はっ、——っは、はっはっ——」

目の暗く濁ったトレーナー「比企谷」からターフで出されて指示はただ全力で一周してくる事のみ。

誰もがあの「皇帝」を作ったと言われるトレーニングの過酷さに息を呑んだのだが、実際に蓋を開けてみれば緩めなトレーニング内容に肩透かしを食らったといってもいいだろう。

だが、初日でもあるのだしこんなものだろうと思って皆が指示されたように一周を終え、補助の眼鏡2人組の弄ってるモニターを眺め数分。

2週目の号令が発せられた。

もちろん全速で、だ。

その号令に誰もが慌てて駆け出して、はしり切る。

そこからは、エンドレスにソレが繰り返された。レースですら一周で全精力を使い切るのに——ソレが23回を超えた辺りから記憶は曖昧だ。

息も絶え絶えに、込み上げる吐き気を何とか飲み込んで一定のイン

ターバルで出来た体内時計に合わせて自動的にスタートラインに戻った時にその地獄はトレーナーの合図をもって終わりを迎えた。

誰もが崩れ落ち、体を痙攣させる中でその声は朗々と響く。

「現状で最も強いのは——キングヘイロー、か」

「はあっ？」

その声に、疲労感よりも苛立ちが勝って震える体のまま彼を睨みつける。

意識が朦朧としても、体がガクガクになっていようとも誰が早かったかを見逃すほどに気を抜いていたつもりはない。

序盤ではずっとドベで、中間からでも抜け出せず——最後の最後に何回か先頭になっただけのウマ娘が同期内最強を認定されるのは許しがたい事だった。

「あんたっ、何処みてたのよっ！——序盤は私っ！ 中盤はテイオーとエアグルーヴ先輩っ、後半はゴルシが単独でアイツは数回トツプになっただけじゃない!!」

「その全てのラップタイムが遅くも早くもならず均一で——未だ脈拍も姿勢も崩れていないのが“ヘイロー”だけなんだよ、ダイワスカーレット」

「——え？」

そう言われて、初めて気が付いた。

誰もが膝をつき、倒れ込んでいる中で——未だにスタートラインに悠然と立って合図を待つその姿に。

汗だらけ泥だらけで全く優雅でもなく余裕も感じない風貌の癖に、愚直にスタートの合図を待ち望んでいるその姿はいつそのこと異常ですらあった。荒い呼吸が、体中の熱量を漏らすその湯気だつ背が——ただ、スタートの合図を待っている。

「——っ」

「お前らに着てもらったタイツには仕組みがあつてな。発汗・心拍数・発熱・フォーム・摂取酸素・負荷・その他の全てのデータが読み込まれるように出来てる。そんでコレが各個人のフォームから心拍数のデータだ。……それぞれの適正やその他の個性もあるんだろうが、ソ

レを超えた瞬間の崩れ具合は酷いもんや」

差し出された画面に映る心拍数などの数字は目に見えて酷くなつていき、それぞれのフォームの最適解だろう青線から大きく逸脱した紅線が目障りなほどブレていく中で——キングの線だけは不気味なほど一定であつた。

頭も下げず、背筋も曲げず——ひたすらに最適な線を追つていく。

綺麗なフォームであつた。

「最適解のフォームを崩さず、全力のまま一定の心拍数を保てる。ソレが理想形と言わずになんていうんだ？」

「……………」

言葉にでかかった言葉は私には認めがたくて、ただ目を背けた。

誰よりも最速で、先頭で、追隨を許さなかつた私の人生で立て続けに訪れる自分より早いかもしれない存在を認めてしまう事がどうしても許せなくて飲み込んだ。

「お前らの問題点も悪癖も全て今の検査で分かつた。ここから先は無理だと思えばすぐに辞める。冗談でも煽りでもなく今からお前らの楽しい学園生活は終わりを迎えてただただレースの為に生きていく生活が待つてる。——それでも勝ちたい奴と思うキチガイだけが残れ。それ以外は今のウチにそこそのトレーナーと仲良くやつてろ」

「……………」

その人を小馬鹿にしたような表情に、誰もが血管を浮かべ苛立ち立ち上がる。

全身が痙攣しようが、疲労で崩れ落ちそうになろうが関係などあるモノか。

舐められて立たぬなら、ウマ娘など辞めてしまえばよい。

そんな怒りを込めて彼の元のにじり寄る私達に厭らし気な笑みを浮かべた「トレーナー」は未だに意識朦朧とした最中でスタートラインに立つキングへ歩み寄り——悪魔のような笑顔のまま彼女の口元に「布」を巻き付けた。

「……? ——つつ、あつ——んぐぐぐつ!!」

「凄いだろ? 今回に一等賞を取ったお前だけへのご褒美だ。——世界つてのはな一流に厳しくて、無能に優しいんだ。だから、コレはお前だけの特権だ」

口元に布を巻き付けた。たったそれだけで尋常ではない苦しみ方をするキングに皆が駆け寄ろうとするのを立ち塞がり阻むトレーナー——いや、「比企谷」が楽し気に嗤う。

「別に毒なんか吸わせてねえからあわてんな。そんで、一流落ちしたお前らには別メニューだ」

「……………アンタが嫌われる理由、よくよく分かったわ」

「そうかい、退部ならいつでも歓迎だ。俺の仕事が減るからな」

「——くたばれ」

自分の記録が1週間たつて伸びなければ冗談抜きでこの男を殺そうと心に秘めつつ彼が弄ぶ紙をもぎ取って——その鬼畜な内容に誰もが眉を顰めたのであった、とき。

|| 今日の蛇足 ||

事務方一同「……………うわあ(ドン引き)」

ルドルフ「……………なんでもっと普通に出来ないモノかなあ(黄昏)」

緩衝材と不器用な男 十 閑話

ぴりついた空気の中でヒツキーを睨みつけるダイワスカーレットちゃん。言うまでもなく他のメンバーの子達も反応は様々だけれども視線は冷たく、好印象とは言い難い。

そんな、ある意味では見慣れた光景の中で未だに変わらない古馴染の「友人」に深く溜息が出るのを止められない。だけれども、私はそんな姿に昔のように戸惑い、俯くだけの少女ではないのだ。

そんな変わらない彼を、支えられるだけの経験と強さを得られたと信じて私は一步を踏み出し——持っていたバインダーを彼の頭めがけて思い切り振り抜いた。

「こらっ、やり方も考え方もそんなんじゃないしっ！」  
「言わなくても分かる」とかそういうのは「分かるように伝える努力」をしてから、でしょ!？」

「……………いでえ」

快音を響かせ一喝する私に子供みたいにバツが悪そうにそっぽを向く彼と、ソレを叱りつける私に誰もが目を瞬かせる。そうして集まった視線には驚きと困惑が見て取れるけれども怯むことはしない。どんなことだって——少しずつ伝えて行って、分かり合うようになっっていくのだから。

「改めまして、カウンセラー兼マネージャーの「由比ヶ浜 結衣」です。ヒツキー……トレーナーとは昔からの付き合いでココに来ることになりました。えーっと、あんまり偉そうな事が言える身でもないんだけど——彼や皆の力になれるようにがんばるね！」

敵意も悪意も無いと伝えるように朗らかに微笑んで、苦し気に蹲るキングヘイローちゃんの背を擦りながら肩を貸してゆつくりと立たせ、ヒツキーをちらりと睨んでやる。

「断りもなく女子に触るのって普通にセクハラだから、ヒツキー。……………ほら、もっと分かりやすいように皆に方針とやり方の説明して？」

「……………わーっただよ」



しばしの間を挟んで諦めたように溜息を吐く彼はなんだか怒られ拗ねた子供のように。だけれども、いい歳した大人がそんな素振りをしたって可愛くないし、ゆきのんにも甘やかすなど言われているので厳しめにいくのだ。曰く、甘やかせばつけあがるとの事。

「キングが現時点で平均の最高値を出したとはいっても内輪だけの話で実際のレースでの記録に照らし合わせてみれば全体的に見れたもんじゃない数値だ。」

それこそ、「皇帝」ルドルフや現役レースで「最強」と呼ばれるミホノブルボン。ワールドカップに参加が決まっているサイレンススズカ、「リギルのエース」ナリタブライアン、その他の最前線で戦っている奴らがこの計測をやれば話にもならない。

だが、現状での「数値」は出て、「課題」の全ては可視化してやった。——後はコレを全て叩き直して、ひたすらに引き上げていくだけだ。死ぬほどに苦しい鍛錬の末に、「な」

私の発破で長らく考えを纏めていた彼がようやく紡いだ言葉はやっぱり厳しくて辛辣なモノ。それでも——彼はその分かりにくい愛情をようやく言の葉という形にする努力をしたのだ。

「お前らならきつと大丈夫」だの、「きつとやれるさ」だのとそんな得ても根拠も知れない言葉、人生を賭けて走るお前らに言えるモノか。言つてたまるモノか。

明確な数値で、確実な根拠で、全てを完璧にして——そこまでやって勝てないのなら俺を遠慮なくぶつ殺せ。

それが、俺のトレーナーとしての責任だ。

それが、人生を賭けているお前らに差し出せる俺の唯一の対価だ」  
「以上、本格的なトレーニングは明日から」、なんて呆然とする皆を置き去りにして去っていく彼の後姿に誰もが声を掛けられなかった。

余りにも重く、過激なその思想と覚悟。

語られなければ誰もが彼を単純に憎んで、嫌って、心置きなく生きていけたはずなのにソレを聞いてしまったが故にもう割り切れなくなってしまう。走るのは自分達で、結果を出すのも自分だというウマ

娘のレースの世界で誰もが心の中で抱えてしまうそんな一種の過剰意識にすら割って入る無遠慮な言葉は、何よりも重い枷になるかもしれない。

だけれども、そのフォローこそが私達の出番だろう。

一人でやらなければいけない事は多いけれども。

誰かに託せない想いだって数えきれないけれども。

全てを一人でこなしてゆく必要は——きつとないから。

「……いや、結局まだなんの説明もしてないまま行っちゃったし」

静まり返ったターフの中で私は静かに苦笑と軽口を零して、皆の緊張を解す。たったそれだけの事でひりついた空気は緩み、各々がようやく肩の力を抜いたのであった。

「由比ヶ浜さん、だったかな。——ありがとう、助かった」

ウマ娘のみんながそれぞれに軽口を叩き合いつつも眼鏡の持つている機材に集まって自分たちの計測結果を興味深げに眺める中で、凜として落ち着いた声が掛けられる。綺麗な栗毛に三日月の様な白のライン、まつすぐな瞳と綺麗な顔立ちはレースに疎い私でも見た事のある有名人「シンボリドルフ」さんその人であった。

そんな偉い人の前に立てばどうしたって緊張してしまいそうなモノだけれど、その表情に滲んだ疲れと苦勞からなんとなく自分と同じ彼に振り回された同志なのだと思感で感じて不思議と緊張はしない。

「ううん、むしろ初回からしゃばってごめんなさい。昔からヒツキーってあんな感じで相談も何もしないで進めちゃうから……シンボリドルフさんも大変だったでしょ？」

「ふふつ、最初の頃は随分と衝突もしたが今は慣れたモノさ。同じチームで堅苦しいのはやめて気さくに「ルナ」と呼んでくれ。親しいモノはそう呼んでくれる」

「うん、私の事も「結衣」ってよんでくれると嬉しいかな——ルナちゃん」

「——ああ、よろしく。結衣」

お互い微かに微笑み合って手を繋ぐ。

つないだ手は「人」と「ウマ娘」、そんな事はやっぱり関係なんて

無いんだと思えるくらいに暖かくて優しいモノ。私は今日、新しい友人を手に入れたのであった。

「おー、なんだ結構いいPC持ってんじゃねーか。貸せよ、ゴルシ様が特製チューンして火星とも通信できるようにしてやるからよ!!」

「さ、触るな!! あっ、だめっ、やめてー!!」

「……………これが私の現状、か。酷いもんね」

「これ、いつまでつけてれば、ゼーっ、ゼーっ」

「ん、今日の練習終了ならみんなこの籠に洗濯モノまとめて入れな。名前は各自必ず書く事。後は今日から飯は私が栄養管理するからソレに従って食べるように。買い食いもその中に含めるから報告する事」

「えーっ、ハチミー今から皆で飲みに行こうと思ったのに〜! ぶーぶー」

「あ、あはは、みんなあの測定の後なのに元気だね……。うん、体が冷えてもいけないしクールダウンしてから今日の施術に移ろうかな?」  
「むっ、ソレはありがたいな。みな、自分の結果は後で確認するとしてまずはクールダウンに移るぞ——ゴールドシップ、備品を壊すなよ」

「あれー、なんか八幡氏は普通に去っていったけど……………これ我だけで片付けるの? マジ?」

握りあった手の脇からそんな能天気なみんなの声が聞こえて、私達はつい可笑しくて笑い合ってしまった—— ゆっくりとそちらに歩みを向けたのであった。

今はぎこちなくても、きつといいチームになる。そう信じて。

## 閑話 Ⅱ 密談Ⅱ

「なんか思ったよりもすっごい熱い人なんだね〜、おねーちゃん」  
の言ってた通りかも」

「……………テイオー、その呼び方は学園内ではやめるように言っただろう。」

誰が聞いてるか分からないのだから。あと、ノックをして入ってくるように」

あれから皆で壮行会代わりにハチミツを呑みに行ったあと、生徒会室に戻り溜まった執務や懸案事項の精査をしているといつの間にか滑り込んできた「妹」が意地悪気な顔をしながらそんな言葉を投げかけてきたので窘める。

それに分かったのか分からないのか判然としない曖昧な声で答えてソファーに彼女は飛び込んだ。

「えー、別に隠す様な事ではないと思うんだけどなあ。パパもママ達もみんなうまくやってるんだからとやかく言われる筋合いはないよー」

「世間体、というモノがあるんだ」

「めんどくさいい」

今度こそ厳しめに言えば彼女はそれでも納得はしなかったもの呼び方を「カイチョー」といういつものモノに戻したので、まあ、今日の所は不問にしよう。

執務をいったん切り上げて構って欲しそうな彼女の隣に腰を下ろしその「自分にそっくりな栗毛と流星をもつ」髪を撫でてやる。それに無邪気に喜ぶその姿はやはり昔から可愛がった妹のそれでつい頬が綻んでしまう。

そう、彼女は間違いなく自分の「妹」なのである——「腹違い」のという注釈はつくが、な。

世間一般で言えば我が実家のシンボリ家の跡継ぎは私一人という事になっているし、父と母の血を注いでいるのは私だけというのは揺ぎ無い事実。

だが、尊敬する父は実業家としても政界においても間違いなく有能で稀代の逸材なのは間違いのないのだがただ一つ欠点をあげるとすれば——女関係においては実に優柔不断であったのだ。

母が父を仕留める王手をかけた時には既に8人ほどの女性が彼に懸想しており、その誰もが離れる気が無い事が判明してしまった。それこそ母が実家の力を使えば潰せない事も無かったのだが、その誰も

が母が認めざる得ない程の「素敵な女性」達であったのが事態をややくしくした。

父を取り合つて喧嘩を繰り返していくうちに仲を深めていつてしまった母が苦渋に苦渋を重ねて出した結論が——捻り潰すのは醜聞を晒そうとするコバエたちの方だったという事である。

パパラッチに週刊誌、市役所に敵体企業に議員。その話題に触れそうなモノ全てをいくつも葬っているウチに母が一番最初に私を身ごもった。

そんな流れからシンボリ家長女が相手もいないまま出産するわけにもいかず父と正式に夫婦になったのだが、結局その他の女たちも「愛人」という名目で召し抱え私達、姉妹兄弟は多くの母を持つちよつと変わった形態に相成つたのである。

ただ、誤解のないように言えば——母たちは皆、有能で良い人達だった。

遊んで暮らせるお金を当家から貰っているにも関わらず自らの職業に邁進しながら子育てを行い、割り当てられた父との「デート」には子供たちも含め愛情をどちらにも目一杯注いで接してくれている。

そんな特殊な家庭なモノだから正月やお盆、夏休みは普通に兄弟姉妹たちで集まって遊んでいたし、いまだにそんな幸せな家庭を隠さねばならない事に疑問を覚える子も多い。

だが、余計な事をすればまた出版社を潰さねばなくなるので多くの人が路頭に迷ってしまう。ソレは避けねばならないだろう。

……いや、というか、父の事は間違いなく尊敬しているのだがこの女性関係に関しては未だにどうかと思う。

男ならしつかり一人を愛せと苦言がいつも漏れ出そうになるが、可愛い妹弟達を見ているとソレも憚られてもの凄くもんもんするのである。

「というか、その血はバツチりおねーちゃんにも遺伝してると思うなあ……」

「うぐつ……いや、今だけだから。別の女がちらついているのは今だけだから」

「シンボリママも似たような事を酔うたびに言ってたよね——ま、私はおねーちゃんの味方だからまっかせておいて！ ばーつちりフオローするよ!!」

「ふふっ、それは頼もしい。後は測定でワザと手を抜かなければなお良いな？」

「あ、やっぱりバレたか」

シレっと悪びれなく舌を出す彼女の頭をこずいて私も苦笑した。

まだ自分が比企谷を信頼しきっていなかった頃にやはり私も似たような事をしたのであまり責める事は出来ないが、あの数値が全力なら本気のお説教をしなければならぬ所である。

目的も意図も分からぬまま課された試練に全力で臨むのは一部では美徳ではあるが駆け引きにおいては愚か者の所業だ。その試金石が無いのならばともかく、他にサンプルがいるのならば出過ぎず、やり過ぎずに様子を見るのは当たり前前の話。

それに恐らく比企谷も気が付いているだろう。

なにせ、それで初期は私と本気で喧嘩をしたほどなのだから。

まあ、ソレも彼には良い経験。私には彼の想いを知るきっかけになつたい思ひ出。

今回の結果を今頃は夜通し精査してメニューを考えているであろう彼を想つてクスリと笑いながらも一人そんな小細工をしていた葦毛の彼女に考えを巡らす。

他の誰もが必死になっている中で最後までシレつとした顔で走り抜けた彼女。だが、全力で取り組んでいるかと思えば細かく呼吸やペースを切り替え心拍数まで偽って全力を隠していた。単なる脳筋かと思えば異常なほど回る彼女の頭と私の視線に気が付いて鼻で笑った彼女はもしかしたら一等の「景品」とあのスーツの隠れ機能にも気が付いていたのかも知れない。

自分の膝元でくつろぐ妹や、他の名だたるウマ娘達の最も恐るべき脅威になるのは——彼女かもしれないな、などと独白を心の中で零して私は静かに笑みを零したのであった。

世界とは、まだまだ未発見の逸材に溢れているものだ。  
その事実には私は胸を躍らせたのであった。

## “貴重品”

夜半もとうに過ぎ去り静まり返ったトレセン学園の中で目の前に流れるデータの数々と膨大に積み上げられた資料のファイルを何度も見比べながら真っ黒になるまで走り書きが書き込まれたルーズリーフ。それらが部屋中に散乱している中で最後の一枚を書き殴った所でペンをほおり投げて深く息を吐いた。

目の奥がジンジンと熱を持ち、頭は詰め込まれた情報と思考で溢れクラクラする知恵熱特有の奇妙な感覚を和らげるためお気に入りのお気に入りの缶で糖分補給をしようと試みるが響くのは“ずずつ”という音ばかり。

既にタワーとなった空き缶の最上段にソレを積み重ねて新しいモノを開けようと手を伸ばした時に――

「夜勤届も出さぬ深夜残業は規則違反だと知っていたかい？」

「ソレを言うならこんな時間まで生徒が校内にいるのも問題だろうが」

背後から掛けられる聞きなれた相方の声にいつもの軽口で返せば“私は生徒会の見回りさ”なんて減らず口が返ってくるのだから可愛くない。

昔は俺が揚げ足を取るたびに詰まったり、しどろもどろになったりと可愛げがあったのだが何処かの誰かのせいですっかりと屁理屈の捏ね方と面の皮の厚さが増してしまったらしい。

呆れの溜息を漏らしている俺に可笑しそうにクスクス笑いながら彼女“ルナ”は伸ばしかけていた俺の手に温いミルクティーの缶を握らせ、興味深げにパソコンの画面を覗き込む。

「ふむ、君の眼が鈍っていないかどうか心配で顔を出してみたが大丈夫そうで何より」

「お前に随分と鍛えられたからなあ……」

彼女の意地悪な笑みにこちらも嫌味をチクリ。

かつて今日の計測を行った時に自分を試すかのように偽りの計測結果を作り出し俺の実力を測ろうをしていたルナと喧々諤々に言い



争ったのは実に苦い記憶だ。だが、洒落にならないことほど後々に笑  
い話として花が咲くのだから困ったモノ。

「で、お前から見てなんか意見があれば拝聴するけど?」

「ふむ……葦毛の彼女とテイオーに関してはまだ2割ほど密度を濃く  
しても問題ないだろう。残りの面子に関しては特性や適性、現段階の  
能力的にも丁度いいと思うよ」

二人してその当時の青さを忍んで忍び笑いをしばし漏らし合って  
残業の成果である今後のトレーニングメニューを見て貰えば、その柔  
らかな笑顔を一転させた彼女が「皇帝」と呼ばれる面持ちに切り替  
えてそう呟いた事に驚く。

彼女が見たトレーニングメニューはあの二人が手を抜いたことま  
で加味して作り上げた内容なのだが、ソレを更に濃くしろと言われる  
とは思いつまなかった。更に言えば、今でさえかなりキツメの内容を  
上増しすればソレは「新人潰し」と言われても反論できないだろう。

「……………そんなにか?」

「ああ、この二人にはそれでも甘いくらいさ。少なくとも「皇帝」の  
後釜になるつもりならそれくらいは熟してもらわなければ困る」

不敵に、傲慢に微笑む彼女の瞳はそれでもまっすぐで重い光を宿  
し、その言葉は冗談なんかではない事を知らしめる。

まるで、ソレは——自信を打ち倒す「ナニカ」を待ち望んでい  
るようで。

「あと、エアグルーヴのメニューももっと増やそう。最近の彼女はと  
ても意地悪なんだ」

「おい、生徒会長」

その底の見えない彼女の思惑になんと声を掛けたものか息を呑ん  
でいると、一転して頬を膨らませ拗ねた子供の様な風情で自分の右腕  
のメニューを勝手に付け足そうとする彼女の頭を軽く叩いた。

「“弁えている”なんて言いつつ最近の彼女の挙動は完全に謀反のそ  
れだ。悪い芽を先に摘み取るのは当然の事じゃないか!!」

「公私入り乱れすぎでしょ……」

完全に“ルナちゃんモード”に入り幼児退行して暴れる彼女をな

だめすかしてデスクから引き離しつつ備え付けのソファに座らせ  
仕事に戻ろうとすれば、今度は俺の肩を引っこ抜くかのような勢いで  
引っ張りこんで強制的に隣に着席させられる。

「……なに？」

「比企谷、君も私に何か言いたいことがあるんじゃないかい？」

「……………いや、べつに」

「いいたい事があるだらう??」

こわ。大切なことなのでもう一度言わせてもらおうが——こっわ。

優しい肩に組まれた手はギリギリと指が食い込んでるし、笑みの  
形の筈の口元はめっちゃ吊り上がりまくって口角がピクピクしてる。  
その上、瞬きも無くこちらを見つめる瞳は瞳孔が開き切り、ウマ耳は  
完全にいきりたった状態のまま足が床に穴が開きそうなくらい前カ  
キを繰り返している。

あ、これ完全にキレてますわ。

生物学的に圧倒的な脅威が隣に佇むせいでちびりそうになる。だ  
が、この比企谷 八幡。男と生まれたからには心当たりも無くヘコヘ  
コ教え子に頭を下げ媚を売るなど言語道——「正座」——言われ  
るがままに素直に正座し、出来る男である俺は言われる前に土下座も  
したったわい。ガハハハッ、やれば出来る子なんですよガハハハッ。  
「さて、大量の浮気については時間がかかるから後にしよう。先に君  
が相談もなく決めたチーム人事についての弁明と長年のパートナー  
である私を最近は蔑ろ気味になっている件についてから話し合おう  
か？」

……俺の知ってる“お話し合い”は土下座を見下ろすところから  
は始まらないんだよなあ。

「何か言ったかい？」

「なんでもないです」

そうして、すっかりと月が沈み込み眩い朝日が差し込むまでの長時  
間を淡々とルナに怒られまくって、詰られまくり、しまいには泣き落  
として来週の休暇には一日朝から晩まで荷物持ちとして引っ張り回  
される約束をさせられたのであった、とき。

夜明けと共に普通に寮に帰っていったけどアイツ、外泊届とかどうやって潜り抜けてるのか毎回不思議でならんな。

「…………アンタ、眼の下の隈がゾンビみたいで凄いわよ?」

「心配するか、デイスるかどっちかにしろダイワスカーレット。——  
——んじや、ミーティングを開始すつぞー」

「二ういー」

夜を徹したお説教の後でも仕事がなくなるわけでは無く、むしろ夜に終わっているはずだった業務まで乗つかるといふそんな苦行を乗り越えた昼過ぎ。日差しが燦燦と差し込む明るいミーティング室に生徒会で遅れて合流するルナ以外がぞろぞろと授業を終え、体操着に着替えた小娘たちが全員揃っているのを確認して声を掛ければ気の抜けた声が返ってくる。

あんまり澆漑とされても今はきついのでありがたいのだが——  
チームとしてはどうなのかしらん、などと他人事のように肩を落とした。

まあ、いい。大切なのは結果。過程のやる気をなんてクソの役にも立たないのだから。

「とりあえず、昨日の計測結果からそれぞれのメニューを作成してきた。細々した調整は入るが概ねはその通りに進むものと思ってくれ」  
「二……………うわ」

渡されたファイルの目次に書かれた基礎トレーニングメニューと参加予定のレースの異常な密度に誰もが顔を顰めて引き気味にソレを眺めていた。その顔を見て苦労して作り上げた甲斐があつたモノだと思わず自画自賛してしまう。

「コレは、また…………」

「これ、ほとんどG1に上がるまでのレースほぼ総出場じゃないですの?」

「レースの予定が空いてる所のほとんどはチーム内でメンバーが被ってるから空けてるだけじゃん!」

「オマケにこの練習の密度って頭おかしいでしょ……」

「うえー、ゴルシちゃん練習きらい。好きくないってばよー」

メニューを眺めつつぶちぶちと文句を漏らす小娘たちに肩を竦めつつ説明を続ける。

「G1以外で躓かれても困るからな。早いとこ最上位に揉まれて貰える最速スケジュールを組んでおいた。そんで、よくありがちなオーバークでの故障を防ぐためにお前らを毎日限界まで搾り上げる内容だ。練習が終われば栄養補給と睡眠以外の何も考えられないくらいに毎日を追い込むから安心して貰っていい。んで——もう一つお知らせがある」

「今の内容で何を安心したらいいのさ……というか、えー、まだあんの〜?」

「……まあ、これは直接見て貰った方が早いな。テイオー、ちよつとそれで軽く流してくれ」

「ほえ? まあ、いいけど」

俺の補足にドン引きしていた面子の中でテイオーが不満を漏らしてきたのでついではばかりに彼女を立たせ、ミーティング室の片隅に置いてあるランニングマシンで軽く走って貰い最後の重大事項の告知に入った。

「そのインナーにはもう一つ機能があってな、コレがお前の理想値のフォーム。こつちが今のお前をリアルタイムで映してるフォームだな」

「おー、凄いハイテクじゃーん!!」

キヤツキヤとはしゃぐ彼女とソレを興味深げに眺めるメンバー。そこで初めてみんながこの練習法の有意義さなどに関心したように頬を緩めたが——次の瞬間にソレは凍り付く事になる。

「テイオー、ちよつとぶざけて走って見てくれ」

「あはははっ、何その指示——! んっじゃ、こんなのどう——あびびびびいっびびっ!」

俺の指示に大笑いしながら欽ちゃん走りをお道化てしようとした瞬間に彼女は路上に打ち上げられた魚の様なりアクションでコントのように飛び上がりランニングマシンから滑り落ちていった。

「……え？」

その光景に啞然としたメンバーは何が起こったか理解できずに固まっている横で、俺は最後の機能について分かりやすく説明してやる。

「そのインナーはこの理想フォームから3cm以上のブレから微弱に電気が流れ、5cmを超えるとブレた箇所には電気が流れる仕組みになっている。これのお陰で走行時にフォームは矯正され、無駄な筋肉も故障のリスクも最小限に出来るという寸法だ。まあ、さっきみたいなおふざけが過ぎるとあんな風に全身が痺れるから気を付けろ。」

以上、インナーの説明と今後の方針は伝えた。まずは全体練習から入る——」

「ちよつと待ちなさいよ！ アンタ、私達の事を機械かなんかだとも思ってる訳っ!! こんな練習が許される訳ないじゃない!!」

事務説明を終えてさっそく練習に移ろうとした俺を引き止めたのはスカーレットであった。完全に耳を立て、義憤から目に怒りを滾らせて俺の手首を捕まえる彼女。そんな綺麗で、まっすぐで、揺るがない意思を持っている彼女が少しだけ眩しく思いつつ俺は一步だけ彼女に振り返り冷たい声で言い放った。

「機械だったら、もつとずっと楽な話だった」

「なっ——」

あんまりな言葉に絶句する。

だが、いまさら聞かなきゃ良かったなんて都合のいい事は許さない。

「機械ならば最速をプログラムして、機体と素材を思うがままに設計して汲み上げればいい。——壊れた足はネジを外してとつかえればいい。」

だが、お前らは違う。

意思があり、癖があり、目標があり、願いがあり、不調もあり、ブ

レがあり、日々体の状態は変化して——壊れた体は何があっても取り替えられない。

壊れただけならいい。だが、お前らのちよつとミスはそのまま死ぬかもしれない。そんな「貴重品」を「機械」みたいに壊さないためにこんな面倒な装備を作つてんだよ、こつちは」

「……………」

俺の言葉に黙り込んで俯いてしまった彼女に鼻を鳴らして腕を振り払い、同じような調子で他の面子にも一応声を掛けておく。

「これに納得できない奴はそのまま退部届を置いて帰つていいぞ。言われたとおり非人道的なのは百も承知でこつちはやってるからな。

——今度こそ以上」

「——」

「——」

俺がヌメリと音も立てずに出ていったミーティング室からは派手に何かを蹴つ飛ばす音が聞こえたが振り返りもせずには俺はそのまま予約していたターフへと歩を進めていく。

さてはて、何人が残るのやら。

そんな他人事のように考えて俺は紫煙を燻らせて歩いてゆくのであった。

そして、思いのほか誰も去ることが無くターフに集合したメンバーに俺が目を瞬かせる事になったのはまた別の話である。そして、後の世に悪名轟く「比企谷ブートキャンプ」という悪魔のトレーニングメニューの原型となる地獄がこの初期メンバーによって熟成されたのもまた別の話である、とき。

## 閑話『激闘！ 恐怖の鶏闘争!!』

「……………なー、ろびんー。ゴルシちゃん練習飽きた〜」

「……—」

ソレはチーム「ゴルヴィス」が本格的に始動してしばし経ち、晴れ渡った絶好の練習日和の事。

メンバーの誰も彼もが死にそうな顔でばて切っている中、その声は妙に響き思わず息を呑んでその声の主に視線を向けて沈黙が降り立った。

何故かトレーナーの事を頑なに「ロビン」と呼ぶ葦毛の変ウマ娘「ゴールドシップ」はさつきまで振り回していたバーベルを無造作に放り投げ、気だるげにその場に座り込んで動かない。なんならばそのまま寝転んで昼寝までしそうな雰囲気すらある。

それは、この厳しいレースの世界ではいわゆる「タブー」というモノである事は言うまでもない。

練習が辛くくじける事は合っても、どんなにサボりたいと思っても、自らを高めるために組まれたメニユーを「飽きた」なんてトレーナーの前で吐き捨てるのは契約破棄をされたってなんの文句も言えない最大の侮辱。

更に言えば、付き合いは短くとも全員の限界を完全に把握してメニユーを組んでいる自分たちのトレーナー「比企谷」という男は偏執なほどなまでの徹底管理主義者だと嫌でも思い知らされている。

そんな男の前で起こした暴挙に、彼の冷たい視線がむいた後にどうなるのか分からず、無言でその沙汰を誰もが待った——のだが。

「……………まあ、そろそろごね始めるころだとは思ってた」

意外にも、呆れたように溜息一つで座り込んだゴルシの行動を許容した事に目を剥いた。

「ちよ、ちよつと！ まさかそれだけ!?!」

「……………それだけって——何があると思ってたんだよ」

釈然としなくて噛みついた私「ダイワスカーレット」はそう問い

返されて、逆に返す言葉を見失ってしまった。

「い、いや、いつものアンタなら弱音とか文句とか言えばスグに“なら辞めろ”とか、“明日から来なくていい”とか言って脅してくるじゃないっ！」

そ、そう。そうだ！いつもの拷問ギリギリ手前の練習に私がキレて反抗してくると冷たい目で言い、切り捨てようとしてくる最低な男。

だが、それでも耐えてきたのは、コイツの指導を受けてから間違いなく自分たちの記録が爆発的に伸びていったからだ。

なのに、ゴールドシップが同じことをした時はお咎めなしだというのは、どうしたって飲み込むことが出来ない。

「……そりゃ、練習に対する弱音なら聞く耳も持たないけどな。ゴルシは“飽きた”と言っただけで“やる気がない”といった訳でもない。ましてや、他の基礎全てが出来てる奴が言うから許される言葉つてのは確かにこの世にあんだよ。——まあ、お前らのメンタル的にもそろそろメニユウの切り替え時かとも思ってたから丁度いい時期だったのもある」

「——っ、なによ、ソレ」

「まあまあ、この人の基準が良く分からないのはいつもの事。それに、その取り乱し方は一流には程遠いですわ」

頭の中にある何かはち切れた音が聞こえ、無意識のままトレーナーに掴みかかろうとする私の肩を抑え込んだのは緩やかな栗毛をもつ“キング”先輩だった。

「とはいえ、あまり無用に煽るのも二流のやる事。私のトレーナーならもつと一流に相応しい説明をなさい」

「お前は揉め事を起こさなければ気が済まないのか、たわけめ」

「それで、なにをするの？ ゴルシじゃないけど僕もマンネリ気味だったから新メニユウは大歓迎だよ!!」

各自トレーニングで散らばっていた皆が集まって来て私とアイツの諍いを取り持ってくれたのもあり、私は伸ばしかけた手を澁々下ろして一歩下がる。



納得も、ムカつきも全く収まってはいないが先輩たちの顔を潰すのも不味いし、トレーニング内容が目新しいモノになるという事自体は吉報である。——苛立ちは、収まらないけれども、だ。

「ふむ、まあ、手始めに——鶏でも捕まえて貰うか」

「「「は？」」「」」

「お、なーんだっ！ 面白そうなトレーニング知ってんじやねーかよ!!」

私達の間の抜けた声と、キチガイの歓喜する声が青空に響いたのであった。

囲まれた金網の中に作られた自然を模した丸太や草、木々。それらが草木特有の湿った青臭さを薫らせ、気を抜けば心が安らいでしまいうような中で、僕は耳を澄まし、感覚を極限まで研ぎ澄まして周囲を警戒する。

虫の鳴声、風の音、地面の熱。全てに注意を払って10m四方のこの「バトルアリーナ」で勝ち残るための手がかりを探し——膨れ上がった殺気に反応して全力でステップを駆けだした。

一撃、二撃、三、四と続いて避けきった先の草むらに忍んでいた刺客からの一撃を紙一重で交わし、その鋭く砥がれた禍々しい爪を持つ「彼」をようやく捕えることが出来る。

白い翼を勇猛に羽ばたかせ産毛をまき散らし、尖った嘴は今なお私を狙って鋭く突きだされ激しい抵抗を試みる。そして、何よりもその瞳に宿る敵意とカンカンに聳え立ったトサカが「自分たちの自由」を奪う仇敵を睨みつける。

そう、彼らの名は「鶏」。

古来より人に飼いならされた畜獣の一種。

だが、捕えられてなお戦意を衰えさせないその姿と、仲間を取り戻

さんと私を囲んで距離を狭めてくる彼らはテレビなんかで見慣れた飼いならされたモノではなく——正に『野生』そのもの。

その闘争心の熱が——私の中に眠る「獣」を呼び起こす。

「へへっ、絶対無敵のテイオーの前でみんなちよつと頭が高い——ぞつとおつとお!!」

鶏とウマ娘。

生態系の上下を巡って、譲れない戦いが始まった。

「ヒツキー、なにこれ?」

「鶏トレーニング。………ロツ〇ーって映画知ってる?」

「……ヒツキーって頭いいのに、すごい馬鹿な時があるよね」

夕方を過ぎても帰ってこないのを心配して迎えに来た由比ヶ浜がお世話になっている養鶏場に来た時に呆れたように白い目で見てくるが、このトレーニング侮る事なかれである。

始めはルナと見た映画からおふぎけで始めた特訓であったのだが、オーナーの意向で自然に近い環境で放牧している鶏たちは野性味、凶暴性、知能が無駄に高かったために何なら最初期はルナが捕まえきれずに負ける事があつたくらいだ。

そこから始まった鶏との攻防戦は激化と緻密さが増していき一種のデスクリーチャーに進化してしまったのがココの鶏たち。

一番ヤバいのは最大の群れを治める「ボス」が入っているゴルシの柵で、もうアレは鶏の軍隊だ。素人は命の保証がない。

そんなこのトレーニング。最初は気晴らし程度に思っていたのだが、危険な動物との戦闘のせいか瞬発やら反射、ここ一番での気合の入り方が目に見える程に向上していったので大変に重宝している。

練習嫌いのゴルシはともかく、他の連中も最近は精神がすり減り気味だったので、このほかに○ツキーやらジャツキーやら、冗談でやってみて予想外の成果を上げたトレーニングをしばらく重点的にやっつけていこう。

そうすれば、向こうからいつものメニューにしてくれと懇願してくる事だろう。

なにせ、フィクションの世界から持ってきたものなのでマジでキツイ。

体は壊さないモノを徹底的に選んではいるが、なんせキツイ。

これ考え付いて、ウマ娘にやらせた奴はマジで頭おかしいに違いない。ガハハハツ、俺の事だな。どうもお騒がせしております。

由比ヶ浜からの冷たい視線を受けながら俺はゴルシがボスの首筋に噛みついて勝利の雄たけびを上げるのをぼんやりと紫煙を吹かしながら見守ったのであった、とき。

## || 蛇足 ||

「ふっぎけんじやないわよっ！ なーにが、っ！っ！そのこと機械なら良かった…!! 道具みたいに使って倒すようなトレーニング繰り返したと思えば、今度はあんなふぎけたトレーニングさせるとか頭がオカシイのよアイツはっ!!」

「あれで教室では優等生キャラとかすげえよな、実際」

「クラスメイトとか先生が見たら卒倒しそうだねー」

「とはいえ、トレーニング強度で言えばいつもの倍はヘトヘトですから効果はありそうな雰囲気ですわね……」

「ほれ、たわけ共、ストレスは分かるがとりあえず食堂が閉まるまでに帰るぞ。コレで夕食抜きというのは冗談抜きで泣く羽目になる。――あと、スカーレット。バケツを蹴っていいのは1日5回までと決めただろう」

ぞろぞろ、ガヤガヤと夜もふけきつた寮に帰っていく面子。そんな彼女達の会話に聞き耳を立てる不穏な影が一つ。

??? 「――対象の好みは『機械のようなウマ娘』と登録、認証し

ました。作戦の成功確率が大幅に上昇したことを確認。速やかに実行に移ります」

感情の籠らない声が、平たんに月夜に響いた。

## ダスカ編 『抱擁』

肺が灼ける。

心臓は早鐘のように跳ねまわり、胸を叩く。

汗で霞んだ視界に、届かない背が滲む。

焦りと苛立ちから追いつがろうと地面を蹴り足掻く私を、嘲笑うようにその影は空を駆けるかのように置いてゆく。

足りない、足りない、タリナイ——何もかも、足りなかった。

それでも、振り絞るように雄たけびを上げて全てを振り絞る。

だが、結果は残酷で誰も捕える事の出来ないままゴールのフラッグは無慈悲に私だけがバ場に残されたまま高々と風にはためいた。

また、 “一番” になれなかった。

それ以外に意味なんてないのに。

それに手を掠める事も出来ない自分の価値は砂のように崩れ、私の身体もソレを追うように崩れ、

「——っヒー！」

自分を置いて行くその背に絶叫をあげながら必死に手を伸ばした所で目を覚ました。

また、この夢だ。

嫌な汗に塗れた体はベタベタと気持ち悪く、未だに暴れる心臓はレース後のように頭に響くくらいに高鳴ってはいるが、見慣れた寮の天井に窓から差し込む穏やかな朝日。ソレとマヌケな寝息を立てている同室の “ライバル” がココは現実だという事を私に教えてくれる。

何とか整えた呼吸と、未だに頭にこびりつく恐怖感を必死に宥め込んだ私は顔を覆い小さく呟く。

「私は、よわくない。私は、はやい。わたしが—— 一番なのっ！」  
何度も、何度も。

そんな空虚な言葉を糧に私は、 “チーム最弱の私” を否定して起き

上がる。

誰にも追いつけていない今の現状なんて、許すわけにはいかなかったから。

私「ダイワスカーレット」は今日も夜が明けきる間に走り出す。

それ以外に、私は自分を守る方法を知らなかったから。

「はい、今日の朝練メニューかんりよ〜！ みんなサキサキから朝ご飯の献立貰って遅刻しないようにねっ！」

少し肌寒いくらいの早朝。皆が最後のランを終えたのを見届けて私「由比ヶ浜 結衣」がそう号令をかけると皆が運動の熱が残っているのか湯気を立てたまま思い思いに練習を切り上げて応えてくれる。

いまだに朝早い練習になれず眠気がとり切れてない自分とは違って澆漑としていたので凄いなあと毎日思う。

ヒツキーに誘われてこのトレセン学園に来てから早いものでもう3か月ちよつと。慣れない事も、分からない事も多いけれども生徒のみんなは良い娘ばかりだし、皆のマナージャーぽいお仕事も個人的には苦も無くやれているので総合的にはいい転職だったと思える。

そう思いつつ立ったまま居眠りしている中二を蹴っ飛ばして起こしかたづけに向かわせていると——一人の女の子が目に残る。皆が明るく笑いながらグラウンドを去る中で一人だけ俯く赤毛の彼女。

「ダイワスカーレット」ちゃん。

真面目で、礼儀正しくて——でも、ちよつぴり怒りっぽい少女。気にかけては、いた。

いつもは練習が終わった後に必ずヒツキーに噛みついて、周りに宥められていた彼女が最近はずっかり元気がなくなり機械的にメニューをこなすだけになっていたのは素人の私でも分かる程だった

から。

多分、ヒツキーに相談したって『自分で乗り越えるしかない』とか言うに決まってる。

厳しい勝負の世界に生きる人間の理屈はそうなのかもしれない。

でも、そんなの、私の知った事ではないのだ。

若い子が悩んで、苦しんでいるのを見て見ぬ振りなんて出来ない。

それが、お節介だったとしても——私はかつてそうやって救われたのだから。

だから、私は。 “由比ヶ浜 結衣” は俯く少女の手を迷わず取って引き留めた。

「ダスカちゃん、今日は一緒に学校サボっちゃおつか？」

「——ふえ？」

彼女の間の抜けた声が朝焼けのグラウンドに小さく響いたのであった、とき。

「えへへ、学校サボって遊ぶのって何歳になってもドキドキするよね」

「え、まあ、はい……」

澄み渡った青空に多くの人が行きかう公園でそんな事を言うのはピンクの髪をお団子に可愛らしく纏めた『チームカウンセラー』の “結衣” さんだ。

その柔らかい人柄と憎めない可愛らしさを供え持つ彼女に朝練から強制的に連れ出された “サボリ”。

“ただだけ固辞をしても “だいじょーぶ、だいじょーぶ” なんて言ってるあちこちに電話を掛け私の休みを取りつけてしまった彼女につれられるままこんな所にまで来てしまったけれども、何が目的なのか未

だに分からない。

街の中を適当にぶらつき、気になった甘いものを突いて——公園で寝転んで今に至る。

意図は全く見えない彼女の行動に困惑されっぱなしでいたが、腰を下ろしてゆっくりする時間が出来れば湧き上がるのはやるべきだったはずのトレーニングや授業の事ばかりが脳内を埋め尽くしていく。

「……あ、あの、やっぱり私今からでも」

「ソレはチームのカウンセラーとして許可出来ない、かなあ。……ダスカちゃん、最近もしかして碌に眠れてないんじゃない？」

「——っ」

起こそうとした身体を緩く引き寄せられ、抱きしめた彼女がそんな事を呟くのに思わず息を呑んだ。

見透かされ、強張った身体を彼女はクスリと笑っただけで受け止めてそのまま芝の上に私を抱きしめたまま寝転んで言葉を紡いでいく。

「私は、レースの事は素人だから分かってあげる事は出来ないけど、その焦りも苦しみも共感してあげられないけど、だから、なんでも言っていないだよ。アドバイスは出来ないけど聞いて、受け止めて、抱きしめてあげるくらいは出来るから——私は貴方の味方だよ」

「——な、によ、それ。むせきにん、よ」

「うん。でも、だから、我慢しないでいいんだ。そのために私はココにいるの」

「——っつ、あつ、うゝえ……あ、あああつ!!」

抱きしめられたその温もりと、本当になんでも受け止めてくれる柔らかな笑顔でただただ労わってくれるその優しさに——私の張りつめていた何かはゆっくりと溶かされて、そこからはもうよく覚えていない。

おつきな声で子供みたいに大泣きして、唯さんの胸で思い切り叫びたかった何かをずっと吐き出した。

「わたしははやいもん」　「うん、ダスカちゃんは凄いよ」

「みんなにまけたくない」　「大丈夫、勝てるよ」

「一番になりたい」　「がんばろ。今日をちゃんと休んだら明日



からもくつとがんばろう!”

“さびしいよつ” “家族と離れて辛いよね、ダスカちゃんは偉い

よ”

“あいつきらいっ” “ヒツキーは本当にお馬鹿さんだもんね？”

“

そんな、ヘドロのように溜まった鬱屈をひたすらに涙と共に吐き出し続ける私を、結衣さんはずっと抱きしめて頭を撫でてくれる。

大好きな母とは違うその安らぎ。

でも、だからこそ、期待してるお母さんに挫けそうな“弱い自分”

を見せちゃいけないという負い目も無く素直に子供のように弱音を吐けた。

最後にはただただ唸って、思い切り抱きしめるだけとなった私をただただ彼女はずっと抱きしめ返して優しく励ましてくれる。そんな、ここに来てから始めて見つけた安らげる場所に私はいつの間にか微睡んで、久々に深い眠りへと堕ちていったのであった。

「……………結衣さん、こっつて」

「うん、トレセンの夜間用トレーニンググラウンド。本当は定時以降の練習は厳禁なんだけど——すっごい“お人好し”が毎日ココで希望者のトレーニング出来るように理事長に掛け合っただって」

そのまま寝入ってしまった私を起こすことも無く抱きしめてくれた結衣さんの胸元で目を覚ましたのはとつぷりと日も暮れた夕方の方の事で、何度も謝る私に彼女は“皆には秘密ね？”なんて言っただけでオシヤレなパスタまでご馳走してくれた。

泣いて、喚いて、弱音を吐き切った上に睡眠と美味しいごはんでお腹を満たした私は現金なモノであれだけ胸の奥底にこびりついていた懊悩なんか無かった様に澄み渡った気分です。トレセンへの帰途へ着いたのだが——最後に付き合っただけという彼女につれられたのがそこであったのだ。

定時以降だというのに多くのウマ娘がレッスンに取り組む中心で佇むのは——自分の大嫌いな「あの男」。

「……………なによ、普通の指導もできるんじゃない」

「うん、ヒツキーは毎日自分のチームのトレーニングが終わったらずっとココで「トレーナーのいない娘」達に指導をしてるんだ。……………自分の実績にはならないのにな」

「……………いみ、分かんない」

遠目で見ているだけでも見知らぬ彼女達にしている指導は的確で、効率的なのが分かる。ソレは、一般的に言えば一流といってもいい指導だろう。

だが、それでも——余りに遅い。

そんな指導を受けていても、誰もがG2で入賞できればいいだろうという程度。

新米トレーナーがステップアップのためにギリギリ選ぶかどうかというレベルでしかない彼女達の全てに彼は手を抜かず、ネチネチといつもと変わらないしつこさで改善点を叩きつけ真剣に改善を促す。「バカだなあ、て私は性格悪いから思っちゃう。自分の寝る間も削って真剣に向き合って——自分のチームだけ見てればこんな苦労も恨みも買わなくていいのにヒツキーは彼女達にトレーナーがつくまで絶対に指導を辞めないの」

なら自分が拾ってやればいいじゃないか、と言葉にしかけてその現実感の無さに言葉は力なく消えていく。

ベテランでも十全に見えるのは2人程度。更に言えば、「あの指導」に耐えられる基礎能力がココにいる全員にない事が嫌でも分かっ  
てしまった。

自分の「全力」以外の指導で彼女達が埋もれて行ってしまう事が、あの男には許せないのだろう。

身勝手だけど、不器用だけど、アイツが——どこまでも真摯に自分達に向き合っている証左が目の前に出されて何を言えるというのか。

「……………なんでコレを私に？」

「好きな人のことを、好きな娘にちゃんと知ってて欲しいっていう私のわがまま、かなあ？」

「……結衣さんって、けっこうずるいわよね」

「えへへ、自分でもそう思う」

私のちくりとした嫌味にも、はにかみながら笑う結衣さん。

そんな彼女にまだまだ全然敵いそうもないと白旗をあげて、私はその柔らかな方に頭をこつりと乗せて小さく息を吐いた。

「……ありがとう」

「うん、明日からまたがんばろーね」

まだまだ冷え込む風にアイツの櫛と、私達の気の抜けた声が流れて消えていった。

〓翌日〓

「んじや、ミーティング始めるぞー」

「二「うーい」三」

午後一番、恒例の掛け声と気の抜けた返事がミーティングルームに響き、それぞれのメニューや改善点、予定について通達している中で最近はめっぽう記録が伸び悩んでいた「スカーレット」に移った時に少しだけ目を見張った。

「……何よ」

「…………いや、今日は元気が有り余ってそうだからな。特別にメニューを二割増しにしてやろう。材木座、ウエイト追加だ」

「はあつ、アンタふざげんじやないわよ!!? まだウエイト増やす気!!?」

「ほむう、もう全身ガチガチに巻いてるのにどこに巻き付けるのだ……?」

ぎゃんぎゃんと最近はなりを潜めていた反骨精神満載で噛みついてくる彼女とドン引きしている材木座にケラケラ笑いながらいなしている——ミーティングルームの扉が轟音と共に吹き飛んだ。

比喩とか、そういうのは抜きで分厚いその扉はひしゃげて向こう側の壁へと吹っ飛んでいき、綺麗にロツカーへと突き刺さる。

俺に掴みかかっていたスカーレットも止めに入っていた奴も、ゲラゲラ観戦に徹していた奴らも誰もが息を呑み、埃煙が立ち込める入り口に目をくぎ付けにさせられたのであった。

果たして、その奥から現れたのは――

「ゲートの開閉に支障があつたので強行突破に移行。……ココがチーム“コルヴィス”のミーティングルームで相違ない事を確認いたします」

流れる栗毛に、無機質な表情と声。

その顔はこの学園に類するものなら誰もが知っている。

ルドルフが7冠以降に出場を控えてから“最強”とその名をあげたウマ娘。

『ミホノブルボン』

そんな怪物が、何事も無かったかのように入室をしてきたが――もし、違ったらどうするつもりだったんだコイツ、なんて能天気な事を俺は心の中で思わずつぶやいてしまったのであった、とき。